

自己表現の場ではなく 「協力プレイ」と捉えたら 会話のしんどさが消えた



「協働」の会話



吉田尚記

ニッポン放送アナウンサー

人と話すのが苦手な“コミュ障”。店員さんと話すことを考えると、服を買いに行くのも面倒なくらい。できれば一日中、人に会わずに、漫画やアニメに没頭していたい——。そんな私が「選考タイミングがほかの職種より早いから、とりあえず受けておこう」と軽い気持ちで受けたニッポン放送に内定をもらい、アナウンサーになってしまいました。

新人のうちから、いきなりラジオ番組を担当することに。毎回、初対面のゲストを迎えます。会話がうまく進まず、絶望的な空気になる日も。「世界一絡みにくい」と言われたこともありました。

ただ、改めて考えてみると、多くの人が「コミュニケーションは、本来できて当たり前のもの」と思いすぎているような気がします。だから、メディアで活躍するコミュニケーションのプロや、プレゼンのうまい人を見て「あの人たちが本能的にできることが、自分にはうまくできない」と後ろめたく思っ

う。“元来できるはずのもの”と思うと、うまくいかないことが苦しくなりますが、“そもそも練習が必要な類いのもの”と考えれば、少し楽になってきます。

では、何を目指して、どんな練習をすればいいのか。新人時代の私が目指したのは、ひとまずゲストコーナーの20分前後自分も相手も気まずくならない状態でした。コミュニケーションとは自己表現ではなく、参加する人がお互いに力を合わせて行う、協力型のゲームだと捉え直したのです。であれば、何も自分が喋り上手になる必要はありません。相手に長く喋ってもらえば楽しいし、会話も続く。聞き上手、質問上手になる練習をすればいい。

質問とは、相手へのパスです。例えば、ちょっとしたテクニックですが、天気の話だって「質問形」にすればパスになります。「寒くなってきましたね」と言えば「そうですね」で会話が終わりますが「寒くなってきましたね。もう冬物は出しましたか?」と質問形にすれば、会話は続いていきます。

大事なのは、相手に興味をもつこと。そう言うと当たり前のように思うかもしれませんが、コミュニケーションを問題なく行うことに集中するあまり、相手に興味をもてなくなる人も多いのではないのでしょうか。ひょっとしたら先生方のなかにも、生徒さんのちょっとした言動に「えー? なんでそう思うの?」「そんなことが好きなの? いつから?」と新鮮に驚く先生もいれば、毎年高校生に接しているからこそ、その驚きや「?」が最近なかなか出てこない、と感じていらっしゃる先生もいるかもしれません。同じ人間は一人としていない。そんな根本に立ち返り、相手に興味をもつこと。そして、話しかける勇気と、うまくいなくてもいちいちへこまない精神力。これらがあれば、あとは練習で何とかなる。それが私の思うコミュニケーションです。何とかなると、案外楽しいものですね。

Profile

よしだ・ひさのり ● 1975年、東京都生まれ。慶應義塾大学卒業。2012年に「第49回ギャラクシー賞」で「DJパーソナリティ賞」を受賞。マンガ、アニメ、アイドル、デジタル関係に精通し、ラジオやアナウンサーの枠にとどまらない活動を行う。2025年4月から東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 社会情報学コースで学んでいる。

取材・文 / 塚田智恵美 撮影 / 吉永智彦

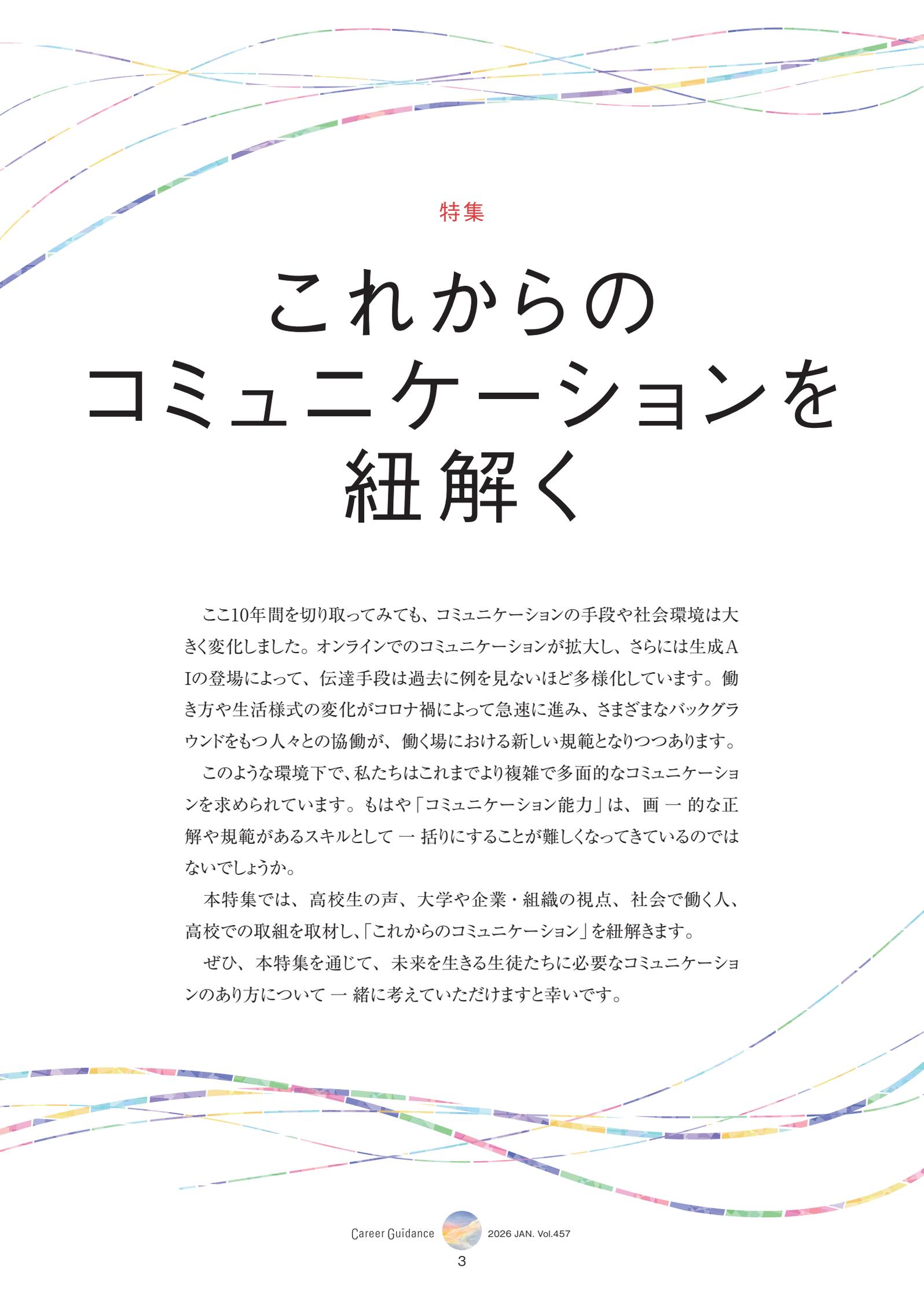
「協働」の会話



吉田尚記

ニッポン放送アナウンサー





特集

これからの コミュニケーションを 紐解く

ここ10年間を切り取ってみても、コミュニケーションの手段や社会環境は大きく変化しました。オンラインでのコミュニケーションが拡大し、さらには生成AIの登場によって、伝達手段は過去に例を見ないほど多様化しています。働き方や生活様式の変化がコロナ禍によって急速に進み、さまざまなバックグラウンドをもつ人々との協働が、働く場における新しい規範となりつつあります。

このような環境下で、私たちはこれまでより複雑で多面的なコミュニケーションを求められています。もはや「コミュニケーション能力」は、画一的な正解や規範があるスキルとして一括りにすることが難しくなっているのではないのでしょうか。

本特集では、高校生の声、大学や企業・組織の視点、社会で働く人、高校での取組を取材し、「これからのコミュニケーション」を紐解きます。

ぜひ、本特集を通じて、未来を生きる生徒たちに必要なコミュニケーションのあり方について一緒に考えていただけますと幸いです。



ツールと社会環境から見る コミュニケーションの変化

ツールの変化

SNSでの コミュニケーションが定着

- スマートフォンの普及とともに、LINE、Twitter (現X)、Facebook などSNSの利用者数が上昇。SNSを利用したコミュニケーションが社会に定着。
- Instagramを代表とする画像・動画に特化したビジュアル中心のSNSの利用が増加。「インスタ映え」が2017年の新語・流行語大賞に。

チャットツールの普及拡大

- LINEなどのソーシャルメディアが身近な人とのつながりを補完するコミュニケーションツールとして一般化。ビジネスの場でもチャットツールの普及が進む。
- スマートフォンでのインターネット利用率がパソコンを上回る。

ショート動画の流行

- 10代～20代の若年層を中心にTikTokが流行。短時間で視覚的に訴求するショート動画のトレンドが始まる。

社会環境の変化

2016
年

「障害者差別解消法」施行

- 障害のある人への不当な差別的取扱いを禁止し、企業や自治体に対し「合理的配慮」の提供が求められ、コミュニケーションにおいても多様なニーズへの柔軟な対応が必要となる。

2017
年

外国人材の受け入れ拡大

- 人口減少による人手不足解消のため、外国人労働者の受け入れ拡大に向けた動きが活発化。職場での異文化・多言語コミュニケーションが求められるように。

2018
年

「働き方改革関連法」 の公布

- 多様で柔軟な働き方を可能にし、労働者がより働きやすい社会を目指した「働き方改革」を推進。リモートワークやフレックスタイム制、短時間勤務制度など、個々の事情やライフスタイルに合わせた多様な働き方が広がる。

2019
年

ハラスメント対策強化

- 「パワハラ防止法」の成立。職場でのコミュニケーションにおけるパワーハラスメントの防止が法令に基づき強く求められる環境へ。

ツールの変化

Web会議ツールの利用が急増

●新型コロナウイルス感染症の拡大により、リモートワークを導入する企業が急増。リモートワークの普及にともない、ZoomなどWeb会議ツールの利用が急速に拡大。画面越しの意思疎通、感情の読み解きが課題に。

対話型生成AIサービスの登場

●大規模言語モデル(LLM)の進化により、AIによる文章生成、要約の精度が飛躍的に向上。
●対話型生成AIサービス「ChatGPT」がリリース。世界中で急速に生成AIサービスの普及が進む。

進展するデジタル化による課題も顕在化

●文章だけでなく、画像・動画・音声の生成AIが普及。AIを使った表現方法の多様化と同時に「ディープフェイク」などのリスクも顕在化。
●SNSやインターネットにおける誹謗中傷などの社会問題に対処するための法制度の整備(情報流通プラットフォーム対処法)やICTリテラシーの向上プロジェクト(DIGITAL POSITIVE ACTION)が発足。

社会環境の変化

新型コロナウイルス感染症が拡大

●緊急事態宣言の発令により、外出自粛や学校の臨時休校が要請される。リモートワークや学習が拡大し、コミュニケーションの「オンライン化」が急速に進行。

デジタル庁発足

●日本における行政サービスのデジタル化の遅れを解消することを目指したデジタル庁が創設。行政手続きのデジタル化が進み、社会全体の「デジタルを通じたコミュニケーション」が加速。

多様な背景をもつ人との協働が進む

●男女共に仕事と育児・介護の両立支援を強化することを目的に、「育児・介護休業法」が改正。男性の育児休業などが制度化。
●「障害者雇用促進法」の改正により、法定雇用率の段階的引き上げが進む。
●国内全体の外国人労働者数は約230万人となり、過去最多を更新(2024年10月末時点)。
●多様な背景をもつ人材との協働を前提としたコミュニケーションが、より強く求められる。

2020年

2021年

2022年

2023年

2024年

2025年

生 徒 ア ン ケ ー ト

高校生は コミュニケーションを どう捉えているのか

社会でのコミュニケーションが多様化・複雑化している一方で、
高校生たちはコミュニケーションをどのように捉えているのでしょうか。

高校生を対象に実施したアンケート結果を基に、
生徒たちが考えるコミュニケーションについて、
高校・大学の現場で若者と接しながら教員研修プログラムを実践している
藤村祐子先生に読み解いていただきました。

取材・文／長島佳子



東京学芸大学
先端教育人材育成推進機構
准教授
藤村祐子先生

東京学芸大学高校探究プロジェクト・プロジェクトマネージャー。大学院修了後、滋賀県の公立高校に理科(化学)教諭として勤務。滋賀県総合教育センターの研修指導主事時代に、コーチング、ファシリテーションに出会う。2021年4月より現職。ワークショップ型教員研修プログラムの開発や各教科における探究的な学びの実現に向けた授業づくりワークショップ等の企画・運営を実践。

コミュニケーション能力を 評価の対象と捉えている

——「コミュニケーション能力」の自己評価について、47%の高校生が「非常に苦手／苦手な方」と苦手意識をもっていますが(Q1)、これについてどうお考えになりますか？

まず、高校生が、コミュニケーションをどのようなものだと考え、どんな点を大切にして「得意／

調査概要

- 調査対象：全国の高校生
- 調査時期：2025年10月
- 調査方法：インターネット調査
- 調査対象エリア：全国
- 調査対象・サンプル：職業「高校生」と回答した15～19歳985名

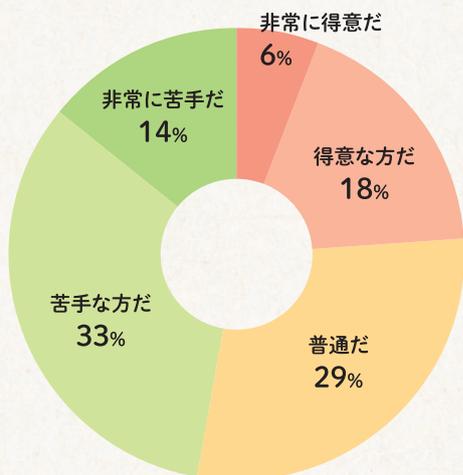


苦手」と回答しているのか気になりました。

Q2の「コミュニケーション能力に対するイメージ」の回答内容を見ると、「自分の意見をわかりやすく話す」「相手の話を聞く」「初対面の人ともすぐに打ち解ける」などが高く、自分が周囲からどう見られるかに関わる行動をコミュニケーション能力として捉える傾向があるように感じます。「生徒の声」(11ページ)でも「社会の中で自分の価値を決める要素の一つ」と答えている生徒もいますね。ほかの声からも周囲からの評価が自己肯定感につながるという意識が見られ、そうした“自分の人間関係づくり”をコミュニケーションの目的と捉えている面も感じられます。

—— コミュニケーションの本来の目的を先生

Q1 自分のコミュニケーション能力の評価



「非常に得意／得意」が24%、「非常に苦手／苦手」が47%とコミュニケーション能力に苦手意識が見られる。

藤村先生Check!



コミュニケーションをどのようなものだと考え、どんな点を大切に「得意／苦手」と回答しているか気になります

はどうお考えですか？

コミュニケーションのゴールは、多様な価値観や新しい考えに出会い、それらを互いにもち寄って組み合わせながら自分の考えを更新し、より良い社会やコミュニティを共につくっていくことではないでしょうか。だからこそ、探究活動ではグループでの協働や対話が大切にされているのですよね。

学校や社会でコミュニケーション能力は大事と言われるなか、なぜ大事なのか、先生たちもすっかり言語化して、生徒たちと共有することが大切だと思います。例えば、探究活動に発表会があるため、プレゼンの練習をしたり話し合いを行ったりすればコミュニケーション能力がつく、と受け取られることがあります。しかし、プレゼンの上達自体がコミュニケーション能力の向上を意味するわけではありません。あくまで手段であり、コミュニケーション本来の目的とは違うのではないのでしょうか。

自分の意見と、相手や対象に興味をもつことから始まる

—— 多様な価値観や新しい考えとの出会いによって自分の考えを更新するコミュニケーションは、学校教育ではどのように行えばよいでしょう？

コミュニケーションするには、大前提として自分の考えをもつことが必要です。「想い・考え」が湧き出れば誰かに伝えたいくなるものです。自分に想いや考えがなければ話すことも、相手の話に興味をもつこともできないと思います。だから授業で

はグループワークをする前に、個人で思考する時間を設定しないと話し合いはうまくいきません。

ファシリテーションでは「話し合い」を「会話」「対話」「議論」の3つのモードに分けています。「会話」は関係性構築のためのおしゃべりや共感を求めるもの、「対話」は結論をまとめようとせず判断を保留し多様な視点を認識するもの、「議論」はディベートのように意見をぶついたり結論をまとめるものです。生徒がイメージするコミュニケーションは「会話」が多いようです。一方で学校教育では学習指導要領で「主体的・対

話的で深い学び」を実現させましようと言っており、「対話」が重要視されているのです。

——対話をするときに気をつけるべき点はどんなことでしょうか？

対話的な学びには、個人的に、コーチングスキルの「傾聴」「承認」「質問」が必要だと思っています。人の話を聞いて（傾聴）、相手を受け止めていくこと（承認）は得意と思っている生徒も多いようです（Q2）。自分の意見と違って一旦受け入れるという「傾聴」「承認」から、安心・安全な場が醸成されていきます。

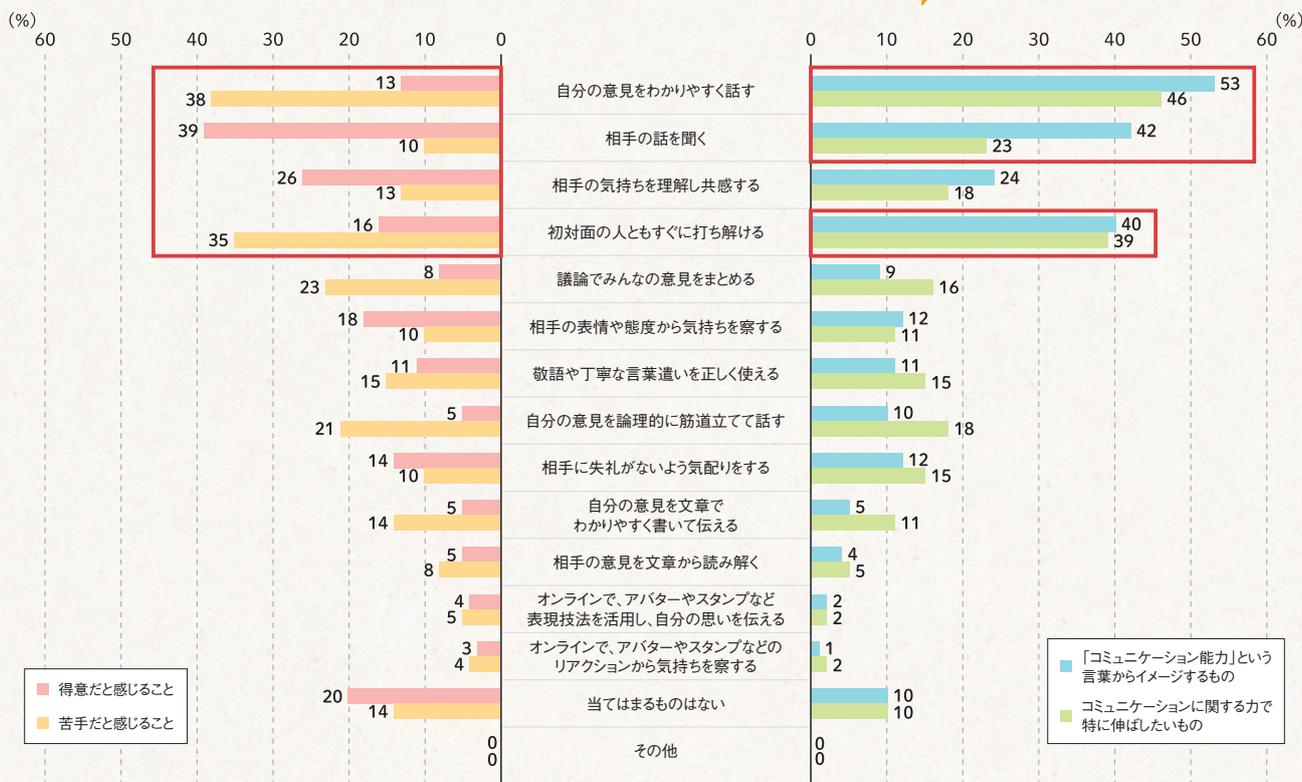
Q2

コミュニケーション能力に対するイメージは？
伸ばしたいものと、得意・苦手と感ずることは？（複数回答）

藤村先生Check!



わかりやすく伝えたり初対面で打ち解けるなど、自分の評価につながることをコミュニケーション能力と捉えているようですね



高校生がイメージする「コミュニケーション能力」は「自分の意見をわかりやすく話す」「相手の話を聞く」「初対面の人もとすぐに打ち解ける」が高く、伸ばしたいものと同様の傾向を示している。一方で、得意なことは「相手の話を聞く」「相手の気持ちを理解し共感する」と相手を観察することが高く、「自分の意見をわかりやすく話す」「初対面の人もとすぐに打ち解ける」など自分発信のコミュニケーションは苦手と捉えている。

私は、これからのコミュニケーションで大事な
のは「質問し合う、問いかけ合う」ことではないか
と考えています。質問するためには相手や対象
に興味関心をもつ必要があります。例えば化学
の授業において、「化学が嫌いだから意見がも
てない」で終わるのではなく、「なぜ化学が嫌い
なのか」という問いかけから始めればよいと思
います。質問を考えて投げかけることで対話が深
まっていきます。自分の考えをもつときも同じで、
個人思考のなかで自分に問いかけ、対話するこ
とで考えが生まれます。コミュニケーションは自分
との対話から始まっているのです。

自分の考えをもったうえで人と対話すると、相
手と自分との違いを感じるようになります。それが
多様な価値観との出会いです。アンケートで「自
分の意見と異なる人と議論する」を苦手と答え
た生徒が多かったですが(Q3)、そこで必要な
のが対話。議論する前に、いろいろな考えがあるこ
とを知り、なぜそう考えたのかという相手の背景を
考えること、そして、その考えを受けて自分の考え
が変容していく対話のプロセスを実感することも、
コミュニケーションの意義ではないでしょうか。

お互いの想いを伝え合う場を つくることで役割を認識

—— 社会でのコミュニケーションが多様化・複
雑化してきて、コミュニケーションという言葉の捉

藤村先生Check!

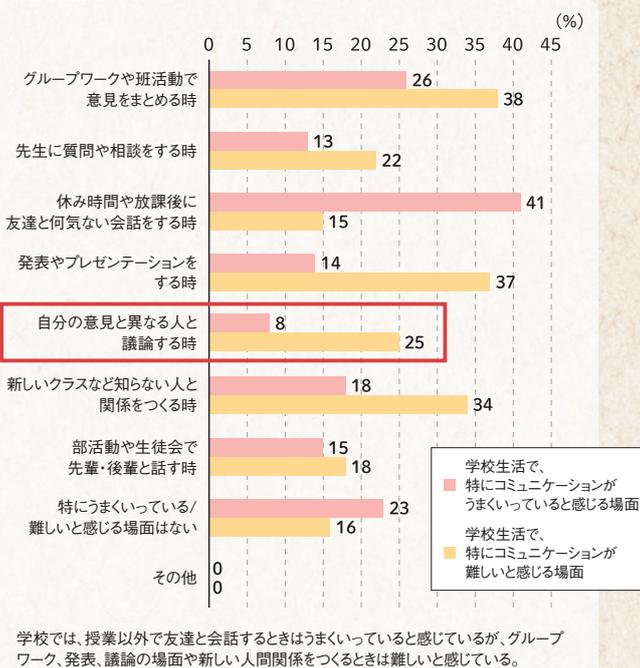


学校以外ではコミュニケーションを難しく
感じていないのは、評価される場面ではな
いと思っているからかもしれませんね

Q3

学校生活でのコミュニケーションは?

(複数回答)



藤村先生Check!

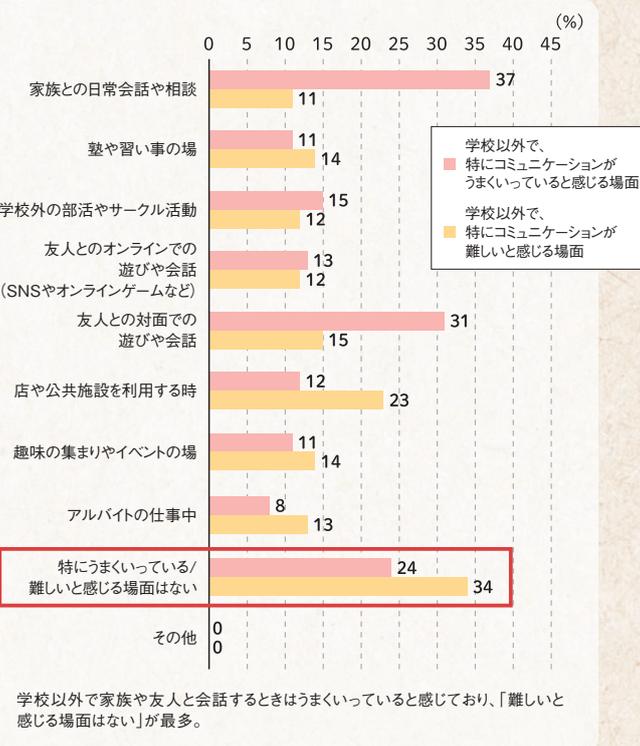


自分の考えと異なる人との出会いは大切で、なぜ
そう考えたのか背景まで対話してほしいです

Q4

学校以外でのコミュニケーションは?

(複数回答)



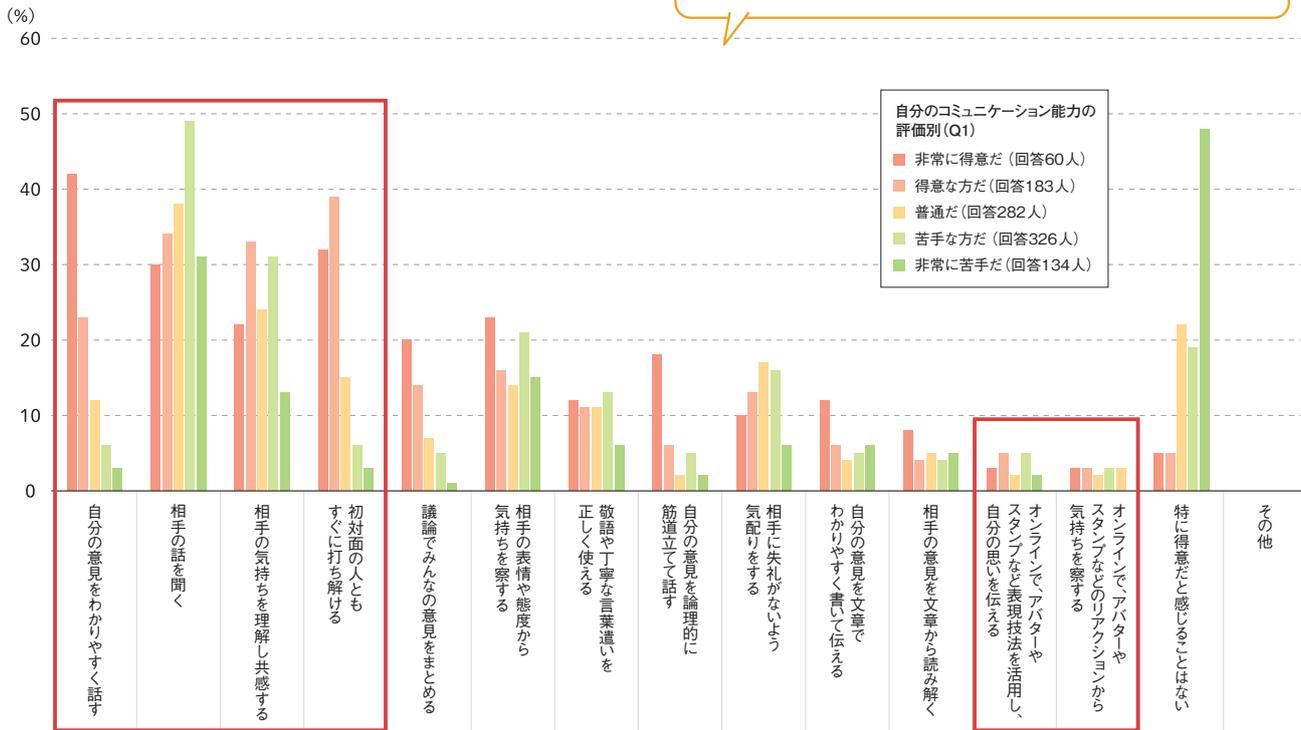
Q5

コミュニケーションにおいて
得意だと感じることは？ (複数回答)

藤村先生Check!



「相手の話を聞く」のが得意ならそれも大切な役割です！オンラインの回答が低いのは、SNSのやりとりはコミュニケーションと捉えていないのかもしれないですね



コミュニケーションが得意だと自己評価する生徒は「自分の意見をわかりやすく話す」や「初対面の人ともすぐに打ち解ける」など能動的な内容を得意だと回答しており、苦手だと自己評価する生徒はそれらに対する得意意識が極めて低い。しかし、「相手の話を聞く」や「相手の気持ちを理解し共感する」はコミュニケーションが苦手な生徒でも得意だと回答している。

え方がわかりにくくなっているように感じますね。

コミュニケーションには言語的なものと、表情や声のトーンなど非言語のコミュニケーションがあります。非言語的コミュニケーションは、対話的な学びでも大切になります。話さないから、コミュニケーションができていないわけではありません。Q5の項目にもある「相手の表情や態度から気持ちを察する」ことも非言語的コミュニケーションです。

——でも生徒たちは、話すことが苦手だとコミュニケーションそのものが苦手だと捉えてしまうのですね。

人にはそれぞれ役割や得手・不得手があると

思います。レゴブロックで例えられたりしますが、それぞれの色(個性)をもった個が集まり、形をつくったり、架け橋となったり、個々に役割を發揮して成り立ち、広がっていくのが社会です。コミュニケーションも同じで、喋るのが苦手でも、書いた文章で伝えたり、聞いて共感する力が高かったり、そのうえで行動できる人など、非言語コミュニケーションも含めてお互いの想いや考えを伝え合い、理解・共有するプロセスを踏めればよいのです。コミュニケーションが「苦手な方／非常に苦手」と思っているでも「相手の話を聞く」「相手の気持ちを理解し共感する」ことは得意と答えている生徒が多数いました(Q5)。それも大



切な役割であり、力です。話すことが苦手だからコミュニケーション自体を苦手と感じたり、みんながみんな、コミュニケーション能力を向上させなければいけないと思ったりする必要はないのではないのでしょうか。

——生徒一人ひとりが自分の役割を見つけるために、学校教育でできることはどんなことでしょう？

まず、学校やクラスで、なぜコミュニケーションが大切なのか、どういうコミュニケーションを目指すのか、などについて対話を通して考え、目的や意義を共有することが大事なのではないのでしょうか。例えば授業での話し合いでペアやグループをつくり、組み合わせを変えていくのは、さまざまな新しい価値観との出会いを期待しているからです。背景や得意分野が異なる多様な仲間との対話が化学反応を起こします。他者との違いを認識するなかで自分の役割にも気づいていきます。

高校では教科・科目と総合的な探究の時間が往還関係にあるのが理想的です。社会課題においても、ある専門分野だけでは向き合えません。探究活動でも、文理融合や教科横断の視

点で取り組むことが重要だと思っています。総合的な探究の時間が、さまざまな価値観を認識しながら、各教科の視点を活かして対話する「場」になるのではないのでしょうか。

我々が開催したイベントに参加してくれた高校生の感想に、「(グループでの探究は)一人で探究をするより色々な価値観をぶつけることができるので広い視野で探究をすることができ、新しい発見もあり、新しい考え方を取り込むことができることが良いことだなと考える」という声がありました。こうした「場」を経験し、学校における探究や対話の意義が実感できた生徒は育っていきます。

生徒も、これからの社会を共につくっていく仲間です。高校生の多くがコミュニケーションを「自分がどう見られるか」「関係づくり」に結びつけて捉えています。本質は、多様な価値観や考えをもち寄り、組み合わせながら新しい視点を生み出していくところにあります。だからこそ、お互いの違いを尊重し、想いを汲み取りながら対話を重ねる経験を、学校という「場」で積み重ねられることが大切です。先生方も、生徒と共に対話のプロセスを楽しんでいただきたいです。

生徒の声 /

コミュニケーションに
上手にしたい

- コミュニケーション能力が良くないと学校のわからないことすら聞けないから改善したいと思っている。(2年生 / 自己評価：非常に苦手)
- 相手の気持ちを察しているつもりになっていても、実際とは異なる場合もあるし、正解もないのでとても難しく感じる。また、伝えるべきことと、伝えない方がよいことの判断も難しいと思っている。(2年生 / 自己評価：苦手な方)
- コミュニケーションはやっぱり社会の中で自分の価値を決める要素の一つだと思う。(2年生 / 自己評価：普通)

- 人それぞれコミュニケーションの定義も、どんなコミュニケーションがその人にとって良いものなのかも違うのが難しいところだと思う。(2年生 / 自己評価：普通)
- つかれてだるいもの。あまり話したくないのに話さないといけない圧迫感。(1年生 / 自己評価：得意な方)
- 周囲で不適切な発言や言葉遣いが目立ち気になる。相手を思いやるという意味でのコミュニケーション能力を世の高校生はもっと身につけるべきだと思う。(1年生 / 自己評価：得意な方)

識者
解説

コミュニケーション

の多面性を考える



PART 1

大学からの視点

「伝わらない」体験を通じて生じる
「伝えたい」という気持ち



PART 2

企業・組織からの視点

脱・能力主義の立場から見えてくる
コミュニケーションの本質

コミュニケーションは相補的なものであり、関係性はもちろん、場や状況によって変容する。

そのように語る、大学学長と組織開発家のお二人に、
コミュニケーションのもつ多様な側面について語っていただきました。



PART 1

大学からの視点

「伝わらない」体験を通じて生じる 「伝えたい」という気持ち

劇作家・演出家でありながら、全国の教育機関で演劇的手法によるコミュニケーション教育に力を入れてきた平田オリザさん。2021年4月に開学した芸術文化観光専門職大学の初代学長に就任して5年目。改めてコミュニケーション能力とは何かを尋ねました。

全国から集まる学生が寮生活で 直面する関係性のあり方

本学は2021年4月、兵庫県豊岡市という人口7万人台の自治体に誕生した公立大学です。1学年80人の小さな大学ですが、芸術や文化、観光を志す学生が全国（今年度は46都道府県）から集まり、1年生は全員、大学に隣接する学生寮で過ごします。寮は個室ですが、キッチンやシャワーは4人一組で共有。組み合わせとして例えば、北海道・東京・地元出身・留学生といった地域性を考慮することで、それまで均質性の強い社会で培われてきたであろう価値観に揺さぶりをかけるよう

設計しています。最初の授業で投げかける「実家のガスがプロパンだった人？」という質問に、大都市圏出身の学生は「何のことかわからない」という表情をする一方、都市ガスの存在を知らない学生も大勢います。こうして、日本に住む者同士でありながら、異なる文化や生活習慣をもつ他者の存在を認識してもらうのです。

入学者選抜段階で、いわゆるコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を問うこともあり、本学には高校時代、演劇部の部長や生徒会長などとしてリーダーシップを発揮してきた学生が多く集まります。そうした学生が一斉に寮生活を始めるため、4月、5月はマウ



芸術文化観光専門職大学
学長／劇作家・演出家
平田オリザさん

ひらた・おりざ●1962年生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。劇団「青年団」主宰。第39回岸田國士戯曲賞ほか受賞多数。演劇活動に加え、多方面で教育活動を展開。ワークショップの方法論に基づく教材が小・中学校の国語教科書に採用される。2021年4月開学の芸術文化観光専門職大学の初代学長に就任。大学のある兵庫県豊岡市に家族と共に移住する。兵庫県公立大学法人副理事長を兼務。

ントの取りあいのような摩擦が生じます。しかし、後述する演劇的手法を取り入れたコミュニケーション教育などを通じて、自己主張だけでは共同生活が成り立たないことや、真のリーダーシップとは、他者や弱い立場の人にも思いを馳せることでもあることに気づきます。

個人のコミュニケーションスキル 以上に問題なのは環境のデザイン

私も担当する1年次必修のオムニバス授業に「コミュニケーション演習」があります。「グループワークなど本学での学びに必要なコミュニケーション能力を演劇などを通じて身につけること」が主眼ですが、重視するのは身体性を伴ったコミュニケーションです。いくらパワーポイントの使い方がうまくても、発せられる言葉が「その人自身からきちんとして出ているか」「自分の身体と地続きになっているか」によって説得力は異なります。

また、「伝わらない」ことのもどかしさを感じてもらうことも重要です。なぜなら、「伝えたい」という気持ちは、「伝わらない」という経験からしか生じないと考えているからです。

具体的には、価値観が異なる相手に、どうすれば自分の言葉が届くのか、あるいは届かないのかをシミュレーションします。例えば、電車の中で知らない人に「旅行ですか」と声をかけるシチュエーション。多くの日本人は普通、電車で他人に話しかけたりしません。では、どうすれば自然な流れで話しかけられるのかを演劇を通じて疑似体験するのです。例えば学生Aが、実生活でサッカー好きならば、話しかけ



芸術文化観光専門職大学 (兵庫・公立)

2021年4月開学。芸術文化・観光学部。演劇人をはじめ各分野の実務家教員が在籍。原則全科目を40人以下で行う少人数教育と全授業の3分の1にあたる800時間の実習を実現。自らコミュニケーション教育を牽引する平田学長は「1、2期生の就職状況はほぼ満点。1学年80人の地方の大学が日本全体を変えられるとは思わないが、小さな成功例を積み重ねていくことでしか社会は変わらないのも事実」と語る。

られる対象の学生Bにサッカー雑誌を持たせてみる。すると「サッカー好きなんですか」という言葉をきっかけに、「ええ、まあ」「どうですか今の日本代表は」「どうでしょう、がんばってほしいけど…」と会話が続き、「旅行ですか」という台詞が出てくることを体験的に理解するわけです。

ここで強調したいのは、私たちは、コミュニケーションを個人の能力の問題というよりは、コミュニケーションを行う環境のデザインの問題として捉えていることです。多くの日本人は、電車で他人に話しかけないとはいえ、絶対に話さないわけではありません。相手が何か落としたら拾ってあげるし、その際無言ということはありません。そこで、どういう環境であれば話しやすくなるのか考えを深めるわけです。これを私たちは「コミュニケーションデザイン」と呼んでいますが、この考え方は、どんな組織でも応用が効きます。例えば病院。医師自身の言

葉遣いや説明の仕方はもちろん大事ですが、同じくらい大切なのは、患者さんが医師に質問しやすい椅子の配置になっているかどうかなど。壁の色や天井の高さはどうか。受付から診察室までの道のりが患者さんを必要以上に緊張させていないか。これらはみんなデザインの問題です。

あるいは会社の会議。意見を言いやすい環境は人によって異なります。普段は他人の視線が気になるけれど、一対一になると饒舌になる若者は多いし、食事を共にするなどリラックスした場であれば本音で話せる人もいでしょう。だとしたら、通常の会議に加え、例えば中間管理職を省いた取締役と新入社員だけの会議や小人数のミーティングを開くとか、社外でのざっくばらんな懇親会を開催することも有効かもしれません。

学生寮を4人一組のユニット制にしているのも、多様性を衝突させるための一種のコミュニケーションデザインにほかなりません。また、本学の授業は1コマ120分に設定していますが、それもコミュニケーションデザインの一環です。というのも、120分という時間は、教員が一方的に話し続けるには長すぎます。すると必然的に、グループディスカッションやロールプレイなどを取り入れざるを得なくなる。アクティブラーニングを促すための制度設計でもあるわけです。

安全な環境下で行う 「伝わらない」という疑似体験

私自身は、今の若者のコミュニケーション能力が、私たち世代より劣っているとは考えていません。ノリやリズム感もよく、友人とは四六時中話しているし、SNSを通じて世界中と繋がっていてもいます。ただ、今の社会は、コミュニケーションがいない方、いない方へと進んでいるのも事実です。少子化や核家族化の影響で、日常的に語らう相手は限られますし、コンビニでも無言で精算できてしまう便利な世の中です。SNSにしても結局は自分と同じ意見や志向の人が集まりやすくなっています。学校で、探究やディスカッションの授業が増えているとはいえ、地方では、クラス替えのない20人1学級のまま小学校の6年間を過ごすことも普通で、無理に口に出さずとも、察しあえるコミュニティで育つことになるわけです。

そうしたなかで大学に入学し、いきなり「コミュニケーション能力がないと就職できませんよ」と言われ、戸惑いながらも就職すると、確かに、やれ異文化コミュニケーションだ、グローバルスタンダードだと追い立てられる。社会が求めるコミュニケーション能力が、どんどん高まっているのです。

豊岡市では本学もお手伝いして31すべて

個人ではなくデザインの問題として コミュニケーションを捉え直す



の小・中学校に演劇的手法を使ったコミュニケーション教育を導入していますが、豊岡の子どもたちが豊岡で一生仲良く暮らすのであれば、そうした教育は必要ないかもしれません。けれど、そうはいきません。高校、大学、社会と世界が広がるにつれ、好むと好まざるとにかかわらず他者と出会わざるを得なくなるから。その時に困らないよう、義務教育段階から最低限のコミュニケーション能力を育むことは絶対必要だと思います。

一番いいのは実体験です。近年は小・中学校でも校外に出て、親や先生以外の大人（他者）と接する機会が増えていますが、先生方の労力やセキュリティの問題は無視できません。思わぬハラスメントに発展し、児童・生徒が心に傷を負うこともあるでしょう。そうしたリスクを避けようとするとは今度は、「わかりあおう」「察しあおう」といった温室のようなコミュニケーション教育になりかねません。

その点、演劇的手法の強みは、安心安全を確保しながら、フィクションの力を借りて、「伝わらない」「わかりあえない」という疑似体験を積み重ね、どうしたら少しでも通じあうことがで

きるか練習できることです。

では、高等教育機関でコミュニケーション教育が必要なのはなぜか。

繰り返しますが、今の学生は、ある種のコミュニケーション能力はあるとはいえ、似通った価値観のなかで発揮していることが多いわけですね。そうした能力を、コンテキスト（文脈）のズレが生じやすいどのような場面でも、例えば外国の方とでも、年上の上司とでも、ジェンダーを超えてでも使えるようにするのが、高等教育機関におけるコミュニケーション教育の役割だと私は考えています。

異文化との衝突といった均質性を打ち破る体験。演劇的手法による伝わらないという疑似体験。そしてコミュニケーションを個人の問題ではなく、デザインの問題として捉え直す視点。こうした学びこそ、就職活動などで測られがちな表層的なコミュニケーションスキルではなく、社会で真に必要とされる、他者理解を基盤としたコミュニケーションの力を育むことになるはず。それは、分断が進む現代社会において、異なる価値観や文化的な背景をもつ人たちと、完全にはわかりあえないかもしれないけれど、それでも、少しでも共有できる部分を見つけ、共存しようと努めるための、とても大切な力だと考えています。

わかりあえないことから ——コミュニケーション能力とは何か 講談社現代新書

「わかりあう」ことに重点が置かれていた出版当時（2012年）の日本のコミュニケーション教育を疑問視し、コミュニケーション能力とは何かを論じたベストセラー。



PART 2

脱・能力主義の立場から見えてくる コミュニケーションの本質

企業・組織からの視点

個人の能力開発に拘泥する人材開発業界に疑問が生じ、「組織開発家」として独立。「脱・能力主義」を掲げた著書が反響を呼ぶ勅使川原さんに、「コミュカ」という曖昧な言葉の危険性や、コミュニケーションの本質について伺いました。

組織を動かすのは個人の「能力」 ではなく「持ち味」の組み合わせ

教育現場や就活市場に次々と現れては消える「コミュカ」「人間力」「生きる力」といった「〇〇力」。最近では「やり抜く力」「リーダーシップ」「起業家精神」など、ただでさえ何を指しているのかわからない言葉が、ますます曖昧さを増しているように感じます。学校でも企業でも、そうした非認知能力が必要だと断定され、「終わりなき自己成長」のプレッシャーに追い立てられ、疲れ切っている多くの人々の姿が目に見えます。

私が「〇〇力」という言葉に懐疑的なのは、曖昧な言葉であるにもかかわらず、それを一元的な正しさとして、**社会の空気が支配されている構造です。多様であるはずの人間に対して、ある特定の能力をもつことが正しく、他人から「こうあるべき」と求められることに違和**

感しかありません。

中小企業などで組織開発のコンサルティングをしている私の元には、経営者からよく、「あの社員の能力が低い」「もっと主体性があれば」といった、従業員の能力を嘆く相談が寄せられます。しかし、私の経験上、**組織がうまく回っていない原因の多くは、個人の能力の**

組織開発家
勅使川原真衣さん

てしがわら・まい●1982年生まれ。東京大学大学院教育学研究科修士課程修了。ボストンコンサルティンググループ、ハイグループなど外資コンサルティングファーム勤務を経て、2017年に独立。企業をはじめ病院、学校などの組織開発を支援。2児の母。2020年から乳がん闘病中。2022年以降、「脱・能力主義」をテーマとした著書を立て続けに上梓。



問題ではなく、組織の構造や人材の活かし方にあることがほとんどです。実際、メンバーの組み合わせを変えるだけで、停滞していたプロジェクトが活発に動き出したり、目立たなかった社員が活躍したりするケースを何度も目にしてきました。ある職場では「使えない」と決めつけられた人物が、別の職場では「優秀」と評価されることも、よくある話です。

能力は、人と人との組み合わせ（関係性）や、環境次第で変わるもの。ある瞬間の状態をスナップショットのように切り取って、「あいつは能力が低い」と断定するのは、揺れ動いて

いる人間に対して不自然なことをしているように思えます。そのため、前記のような相談をもちかけてくる経営者には、問題を個人の能力のせいとせず、今いる人材、それも、さまざまに「持ち味」をもった従業員を、どう効果的に組み合わせるかを一緒に考えましょうと伝えるようにしています。

コミュニケーションのスタイルは人それぞれ。そこに優劣はない

こうした考え方は自動車の「機能」に例えるとうわかりやすいと思います（図表参照）。「リー

図表 組織の機能を車に例えると？

機能	車のパーツ	ディスカッション中の言動
駆動系	アクセル	明確な意図のもとに推進に努めた
	イグニッションキー	冒頭のみ議論を推進した
制御系	ブレーキ	明確な意図のもとに議論を制止させた
	エンジンブレーキ	同意しかねる点があり、徐々に議論を制止するよう介入した
	クラクション	完全に制止させたわけではないが、議論の行方に警鐘は鳴らした
情報系	ナビゲーション	議論のゴールまでの道程を示し、横道に逸れないよう指示した
	メーター	客観的データを議論の材料として示した
	オーディオ	役に立つかどうかではなく言いたいことを言った
調和系	ボディ	主張しないが、議論の場にいる
	オイル	円滑な進行のため周囲を気遣った
	タイヤ	円滑な進行のため空気を読み、議論の流れに従っていた
	エアコン	場が心地よいものになるよう動いた

※「能力」の生きづらさをほぐす（勅使川原真衣著）より

ダーシップ」や「主体性」といった、今の社会で特に求められがちな要素はおそらく、車でいうアクセルのような機能を指しているのだと思います。確かに、組織の推進力を生み出す重要な機能です。しかし、アクセルだけで車を安全に運転することはできません。当然、危機を察知し事故を未然に防ぐブレーキが必要ですし、指示した方向に確実に曲がるタイヤも不可欠です。

ポイントは、これら車の機能同士に優劣はないこと。「アクセルだからすごい」「ブレーキではダメだ」とはならないはず。それと同じで、個人にも良し悪しはありません。あるのは、「持ち味」とも言うべき、発揮しやすい特性の違いだけです。

コミュニケーションのスタイルも人それぞれです。高校生にとっての「コミュニケーション力」とは、理路整然と自分の考えを言語化し、能動的に発信するといったイメージが強いでしょうし、企業でも、そうしたコミュニケーションのスタイルが求められがちです。自動車であれば駆動系。なるほど、目立つし、組織をリードしている感じが出ます。

しかし、そういう人たちだけでは社会は成り立ちません。普段は大人しいけれど、いざというときに警鐘を鳴らすクラクションのようなタイプも必要ですし、「ところで、こっこの課題につ

いては議論していなかったよね」と方向を微調整するウインカーのような役割も大切です。意見が対立したときに間を取り持ち、周囲に気を配るオイルのような役割も欠かせません。

目立たないけれど、組織の中で重要な役割を担ってくれている人の存在を可視化することが組織開発の入り口。それによって、不必要な人などいないことに気づいてもらうのです。

コミュニケーションの本質は相互変容をもたらすこと

そうした前提に立ったうえで、「コミュニケーションとは何か」と問われれば、相互変容をもたらすものだと私なら答えます。言葉を尽くし合い、互いの発言や質問によって、相手も自分自身も揺さぶられ、変わっていく。これがコミュニケーションの本質ではないでしょうか。もちろん、家族との日常会話や友達との雑談まで、いちいち変容を期待するものではありませんが、でも考えてみれば雑談にしても、相手の何気ないひと言に対して、「ウケる」「面白い」と感じることも、一種の変容と言えるかもしれません。

コミュニケーションは目の前の人と一対一でするものとも限りません。例えば、私はここ数年、多くの著書を世に出していますが、執筆しながら「この考え方で大丈夫だろうか」と常

問うべきは個人の「能力」ではなく「持ち味」の活かし方

に脳内で自分と対話しながら書き進めています。また、出版後も内容について読者に揉んでほしいと思い、多い時には週に1回ほどトークイベントを開催し、いただいた質問はすべて次の執筆に活かしています。読者に何かしらの影響を与えていると同時に、私自身も変わっていく。まさに相互変容です。

対談にしても、インタビュー取材にしても、相手の発言や質問次第で、場が大きく変化していくことも実感しています。予定調和的な流れでは、その場はスムーズに進行しますが、それだけでは発展が見込めません。めんどくさいこと、わかりにくいものから逃げずに向かっていくことも、相互変容のカギになると感じています。

星だけではなく星座として見る。 組み合わせ次第で見え方は変わる

生徒間のコミュニケーションの齟齬が原因で、クラスの行事やグループワークがうまくいかないときは、冒頭で述べたように、個々の生徒のコミュニケーションスキルの問題として片付けず、頻繁にグループ分けを行うなど組み合わせを工夫してみてもはどうでしょうか。意図的に、異学年や外部の人との交流の機会を設けることもよいかもしれません。多様な人を相手にコミュニケーションすることで、「自分はコミュ力がないから」と自信なさげにしていた生徒が、「こういうタイプが相手だと喋れなくなってしまうな」とか、「あの人のようにうなずきな



「から聞いてくれると話しやすいな」など、自分ならではのコミュニケーションのスタイルに気づいていけると思うのです。うまくコミュニケーションがとれなかったとしても、「たまたま相性が悪かっただけ」と精神的にラクになるかもしれません。結局のところ、コミュニケーションとは双方向的かつ、その場で即興的につくられるものなので、本人だけではどうにもならないし、ましてや個人の能力の問題として片付けることはできないと思います。

ある小学校の先生が、「僕は星を見ないで、星座を見るようにしている」と話していました。生徒個々の能力だけで評価せず、また、切り取られた一瞬だけで判断せず、関係性によって大きく揺れ動く様子まで俯瞰して捉えているのだと感じ、心を打たれました。

生徒同士の話し合いで分断が生じている場合でも、その状態をマイナスとせず、相互

変容の過程として捉えてみる。反対に、話し合いが盛り上がっていた場合は、「今は盛り上がっているけれど、見過ごしている点がないか少しだけ考えてみようか」などと投げかけるのもいいかもしれません。空気を壊さないよう、意見を押し殺している生徒がいるかもしれませんから。

生徒だけではなく、先生にも多様なコミュニケーションのスタイルがあると思います。教師だからといって全員が言語優位とは限らず、書きながら考えをまとめるほうが得意な先生もいるでしょう。そのため、例えば、職員会議の前日にアジェンダを出し、前もって考える時間を設けたり、会議の場で結論を出さず、意見書の形で後日の反応を待つようにしたり。それぞれの「持ち味」を活かせるコミュニケーションの形ができたとき、生徒にもきつといい影響があるはずです。



「能力」の 生きづらさをほぐす

どく社

移ろいがちな他人の評価が、生きづらさを生み出す「能力」社会。そのカラクリを教育社会学と組織開発の視点から解きほぐす。著者第一作目にして話題の書。



「働く」を問い直す 誰も取り残さない組織開発

日経BP

若手、管理職、人事担当者、経営者。それぞれの立場で頑張っているのに、なぜかギスギスしてしまう職場を念頭に、誰も取り残さない組織開発は可能かを考える。

CASE

1

コミュニケーションとは

人ともものが滞りなく
動くチームづくり



大和輸送
倉庫管理者
山田孝一さん

CASE

2

コミュニケーションとは

違いを尊重して、
生活を一緒に描くこと



イムス札幌リハビリテーション病院
認定作業療法士
阿部來夢さん

社会人インタビュー

社会で発揮されている コミュニケーションの形

仕事の内容や役割、関わる人、目指す結果によって、
求められるコミュニケーションの形はさまざまです。ここでは異なる職業に就く4名に、
それぞれの立場におけるコミュニケーションについて伺いました。
日々の隔たりを埋める試みと、通じ合おうとするこの意味とは？

CASE

3

コミュニケーションとは

違いを翻訳し、
成果へ変えること



ネクスコ東日本エンジニアリング
施工管理員
小林大輔さん

CASE

4

コミュニケーションとは

相手を知り、
見えないところをつなぐこと



松本印刷
営業本部 拠点営業部
増田麻里奈さん



人ともものが滞りなく動くチームづくり

誰と、どう関わる仕事か

倉庫で働く作業員が迷いなく動ける状態をつくり、迅速かつ安全に荷物を届けることで、生活者の営みを守る

どんな「隔たり」があるか

作業員の経験や知識の差、言葉の壁によって、指示への理解度に違いが出たり、作業効率が変わったりすること

通じ合えた瞬間

地道な意思疎通の工夫によって、作業手順を変更しても混乱なく対応でき、作業時間の短縮にもつながった

経験の壁、言葉の壁を超えて

日々、大量の荷物を入出荷する物流倉庫。ここで交わされているのは、必要な人へ、必要なときに、必要なものを届けるための「機能する」コミュニケーションと言えるかもしれません。

2090坪もの敷地面積をもつ大和輸送の行田第二倉庫（埼玉県）では、メーカーなどの荷主から商品を預かり、主に関東エリアの目的地に運んでいます。預かった商品を適切に保管し、求めに応じて安全に、迅速に運ぶ。そのために、入出荷管理から人員の配置まで担当するのが、倉庫管理者である私の仕事です。

大和輸送
倉庫管理者
山田孝一さん

やまだ・こういち ● アミューズメント施設での接客業を経て、2018年に入社。20代で取得したフォークリフトの免許を活用し、フォークリフトオペレーターとして働いたのち、倉庫管理者を任される。現在は大和輸送 行田第二倉庫にて、所長代理も務める。



物流業は「エッセンシャルワーカー」と呼ばれるとおり、人々の当たり前の営みを維持し、守る役割を担っています。荷物の遅延や停滞は、暮らしを止めることにもつながりかねない。つまり、予定された時間までに、荷下ろしや積み込み、搬送、格納といった作業を、確実に終わらせなければいけません。

その作業を行うのは、主にフォークリフトオペレーターと呼ばれる、フォークリフトを運転して積み下ろしをする作業員です。どの商品から格納するか、どの順番で運ぶかによって、作業効率は大きく変わります。しかし、作業員の中には、経験や知見の差があることも多いです。また、行田第二倉庫ではスリランカ人の作業員も活躍しており、言語の壁もあります。管理者である私と作業員とのやりとりが滞ると、荷主や届け先に迷惑をかけることに加えて、作業員たちの残業時間も増えてしまいます。

そこで私は「口頭で、全体に指示する」だけではなく、一人ひとりが迷わず動けるような関わり方を心掛けています。全体の段取りを説明するときも、ホワイトボードを使って視覚的な説明を行う。さらに、現場に出向いて進捗をたびたび確認し、必要があれば個別に声をかける。そもそも、人それぞれの個性や特性をふまえた業務の割り振りをしておくことも、スムーズにみんなが動ける状態をつくるには大切です。

外国人の作業員の場合、荷物に書いてある日本語の商品名を読めない、商品ラベルの違いにもなかなか気づけないことがあります。商品の取り違いが起きないように、現場に行って一緒に指差し確認をしています。

「動いて」ではなく「どうすれば動けるか」考える

事前にどれだけ綿密な段取りを組んでも、日タイレギュラーな事態が発生します。荷主からの依頼でスケジュールが変わったり、在庫確認のような付帯作業が発生したり。その都度、館内アナウンスでリアルタイムの情報共有を行い、人手が足りないときは、私自身がフォークリフトに乗っています。

現場を動かすには、一方的に指示を出すだけでなく、現場からの意見や提案を聞くことも必要です。私には「その順番で作業するのは非効率なのでは?」と見えることも、理由を尋ねると、意外な考えが聞けることがあります。「このほうがやりやすい」といった率直な声やアイデアが現場から出てくるように、作業員とはなるべく壁をつくりません。命令形の言葉遣いはせず、丁寧な言葉で話す



人手が足りないときは、みずからフォークリフトを運転し、荷下ろしや積み込みを行うことも。

ようにしています。

いずれも地道な工夫ばかりですが、意識し続けることで意思疎通がスムーズになり、みんなの理解度も上がっていきます。先日、出荷方法を大きく変えたときも、丁寧に意図や変更点を伝えたことで、ミスなく作業が進んだばかりか、業務時間を1時間

縮めることができました。「こう動いて」と指示するのではなく「どうすれば動けるようになるのか」を考えることの大切さを実感しています。

大切なものを守り滞りなく届けるために

また倉庫管理に必要なのが「安全を守る」「商品を傷つけない」ためのコミュニケーションです。

電気モーターで動くフォークリフトは、運転音が静かで、近づいてきても意外と人が気づかないケースがあります。事故を防ぐためには、運転している人が「通るよ」と大きな声で注意を促すこと。それも私が率先して行うことで、他の人にも真似してもらい、チーム全体で習慣づけられるようにしています。

さらに商品が破損しないよう、持ち運びに注意が必要なものについては、情報共有を徹底する。過去事例からの学びを伝え、意識を高める。物流の品質は、こうしたことの積み重ねで向上していきます。

私の仕事において、コミュニケーションとは「確実にものを届ける」使命を遂行できるチームをつくること。そしてイレギュラーを乗り越え、日々当たり前のように届いている荷物を、間違いなく届けられる基盤を構築することです。私は口下手なほうで、饒舌に人を楽しませるようなタイプではありません。でも、この仕事においては、真面目に人やものに向き合う姿勢のほうが、求められる素質のような気がします。

大切な商品を傷つせず、安全を守り、確実に届ける。その目的を果たすコミュニケーションを重ねていきたいですね。

違いを尊重して、生活を一緒に描くこと

誰と、どう関わる仕事か

障害や加齢による課題のある患者さんと、その人らしい生活を送れるようにするための計画や訓練を一緒に行う

どんな「隔たり」があるか

年齢や性別、生活習慣などからくる「考え方の違い」/ 現状の捉え方や今後の目標に対する「認識のズレ」

通じ合えた瞬間

話を聞き、観察し、問うなかで、生活上の課題や可能性にご本人が気づき、私たちの力も必要としてくれた

自分の当たり前を押しつけず上手な生活を一緒に考える

病気や怪我による障害や、加齢によって、生活のなかでうまくいかなかったことを抱えた方が、その人らしい生活を送れるようにお手伝いする。イムス札幌リハビリテーション病院で、私は作業療法士として、そのような仕事をしています。移動や食事、着替え、仕事の実務、趣味の活動。それらの生活行為について、患者さんと「したい作業」「する必要がある作業」「家族などから期待されている作業」を共有。その目標を見すえてトレーニングや環境調整といったリハビリを進めていきます。

大事にしているのは「正常か異常かではなく、上手か下手かで捉える」こと



イムス札幌リハビリテーション病院
認定作業療法士
阿部来夢さん

あべ・らいむ●(写真右側)大学卒業後に入職。回復期の患者さんの病棟や訪問でのリハビリに携わったあと、関東の大学院に進学、同じ医療法人グループで精神科の患者さんのリハビリも経験。札幌に戻り、現在はリハビリテーション科の主任を務める。

です。患者さんのなかには、体を動かしづらい麻痺が残るなど、医学的に正常ではない状態が続く方がいます。ですが、麻痺があってもパソコンや車椅子を使って「上手に日々を送る」ことをされている方もいます。以前と同じ動きは難しくても、やり方を変えたり器具を使ったりして、ご本人が望まれる生活ができるように後押しするのが、作業療法士としての目標です。



食事の支度や洗濯物干し、筆記具での書き物、外出しての買い物、将棋や囲碁など、退院後の生活を想定したリハビリに取り組む。

そのリハビリについて患者さんと話し合うときは、年齢や性別、生活習慣などからくる考え方の違いをよく感じます。例えば「夜に一人でパジャマに着替えられたほうがいい」と私が思っても、「外出しない日は一日中部屋着で過ごしてその恰好のまま寝る」という方なら、着替えの練習はそこまで重要ではありません。「歩行器を使えば外に出やすくなる」と提案しても、「ご近所に見られたら恥ずかしい」と拒まれる方もいます。

だから日々のコミュニケーションでは「自分の当たり前は、相手の当たり前ではない」と認識し、考えを押しつけないようにしています。また、この人は自分と考えが違うからよくわからない、と心理的ハードルを高めるのではなく、その相手の考えに興味をもち、話を聞くように心掛けています。「あなたはあなたの専門家なので、あなたのことを教えてください」と。そこに作業療法の専門家としてお伝えできることも交え、生活上の課題は何か、それをどう解決するかを一緒に探るのです。

観察し、問いかけることで互いに発見できることがある

患者さんの現状の受け止め方や、リハビリで見すえる目標が、私たちの認識と違っていることもあります。

脳血管疾患(脳梗塞など)後に、注意散漫や物事がうまく組み立てられない高次機能障害の症状が出た方が、ご自身では変化を感じず、異常がある扱いをされたくない、と思われることがあります。大病で筋力が落ちたあと、ご本人は「ものをきちんとしまっ生活」に戻るリハビリを想定していても、実際は「よく使うものは手が届くところに並べておく生活」に切り替えることを目指したほうが、快

適なこともあります。

そうした認識のズレを埋めていけるよう、患者さんの今までの生活やこれからの生活を24時間365日思い描くつもりで、相手をよく観察し、問いかけることもします。

外出訓練で患者さんの家に同行したとき、冷蔵庫に葉物野菜が入っていたとします。傷みやすい葉物野菜があるなら週1回以上買い物をしていたと想像できます。「買い物はよく行きますか」「荷物は持ち帰れそうですか」などとお聞きし、何はできて何は困難か、工程を分けて一緒に見極めます。

患者さんの趣味が陶芸だったとします。それは作ることが好きなのか、作品ができあがるのが嬉しいのか、完成品を使うことの喜びが大きいのか。楽しさの構成要素を質問で分析し、院内のレクリエーションの参加状況やそこでの表情からも汲みとって、その人らしい今後の生活と、そのための訓練を一緒に考えます。

できないことの気づきをよりよい未来につなげていく

高次機能障害の症状が見られたある患者さんは、「私は大丈夫」と、リハビリや、周囲に必要な配慮を知らせるヘルプカードの所持を断られていました。でも、お出かけが好きな方だったので一緒にスーパーに買い物に行ってみると、にぎやかな店内では注意散漫になり、欲しいものをうまく見つけられませんでした。

ただ、それで買い物が不可能と決まったわけではありません。「うまくできない」とご本人が気づかれてから一緒に対処法を話し合い、なじみのコンビニエンスストアでなら、いつもの店員相手にいつもの方法で買い物ができるとわかりました。

その方が退院されるとき、当初は拒まれていたヘルプカードを差し出して、「私のことを書いてください」と言ってくださったんです。今までの関わり合いのなか

で信頼関係を築けたのかな、と嬉しくなりました。

相手に興味をもち、互いの違いも尊重しながら、生活上の課題や目標を一緒に見つける。そうしたコミュニケーションを通して、患者さんの現在と過去、未来をつなげていくことを今後も大切にしたいですね。



手前の紙は「作業工程の遂行度」や「楽しさの構成要素」を分析する評価表。院内にはさまざまな遊び道具も常備されている。

違いを翻訳し、成果へ変えること

誰と、どう関わる仕事か

高速道路を守る発注者と施工会社の間に立ち、双方の専門性が活かされるように現場を管理・調整する仕事

どんな「隔たり」があるか

建築のプロと高速道路のプロで専門性や優先順位が異なり、お客さまへの配慮や安全意識に差がある状態

通じ合えた瞬間

雑談を重ね信頼関係ができ、重要な調整や改善依頼が素直に受け止められ、工事が無事に完了した

高速道路を守るプロと建築のプロの間で

高速道路という広大な公共インフラを担うNEXCO東日本グループ。料金所のゲートや料金所棟、サービスエリアやパーキングエリアにあるトイレ棟、除雪作業用の設備など、高速道路にはさまざまな建築物があります。それらの保全を行うのが私たちの仕事です。

老朽化や利用環境の変化に合わせて、補修工事も生じます。現場で施工を行うのは、受注者や施工会社の方たちです。建築のプロフェッショナルで、現場の経験、知識、高い技術をもっている方々。一方で、発注者の立場である、親会社のNEXCO東日本は、高速道路という社会基盤を守るプロです。安全管理や品質管理、守るべき法令や要領の知識が豊富にあります。

両者は異なるプロフェッショナル同士だからこそ、見ているものや、優先順位が違うこともあります。私の仕事は、その間に立ち、両者をつないでスムーズに工事が進むように調整する、いわば翻訳者



ネクスコ東日本エンジニアリング
施工管理員
小林大輔さん

こばやし・だいすけ ● 大学で建築学を専攻していたが、内定していたハウスメーカーが倒産し、建築に関係のない会社に入社。2008年に転職。現在はNEXCO東日本 郡山管理事務所に駐在し、課長代理も担当。1級建築施工管理技士取得。

のような役割です。

公共インフラにおいて、サービスを停止せずに工事を行うことは非常に重要です。だからこそ、一般的な建物の工事とは事情が異なることも生じます。例えば料金所のゲートの工事では、通行するレーンを止めないと工事を施工できないことがあります。施工会社の視点では、経験上「この日の昼間にやるほうが、効率が良い」といった考えがあります。しかし発注側は、高速道路を利用するお客さまのことを考えて、交通量が多い時間帯は避けたいと思います。その間を私が取りもち、「この場合は夜間施工の方が良い」と判断したら、スケジュールの調整をしていきます。

トイレの改修にしても、お客さまに不便を与えないよう、仮囲いの位置や作業範囲を考えなければなりません。お客さまの気持ちを想像し、丁寧に作業を行いたい。とはいえ悠長に進めては、完工スケジュールを守れない。工事が遅ればかかる費用も増え、影響は大きいです。そのような難しい環境で、両者それぞれに見ている景色を想像しつつ「どちらが正しいか」ではなく、安全や工事の品質の向上、高速道路を利用されるお客さまの利便性の向上につながる判断をしていきたいと考えています。

伝え方以上に大切なのは「言葉が届く関係」の構築

異なる専門家同士をつなぐ翻訳者。そう言うと、言葉選びに注力するイメージがあるかもしれませんが。でも私は「どう伝えるか」以上に、「言葉が届く関係づくり」が大切だと考えています。

私の仕事は時に、自分より知識も経験もあるプロフェッショナルに対して進言し、調整をお願いしなければならない立場です。話をするための最低限の知識を身につけるのは当然として、いかにも管理者という態度で「こういう決まりなので、調整してください」と指示をするだけの人間に対して、日々現場を動かすプロたちが、はたして信頼を置くでしょうか。

仕事といえども、人間関係の中で行われます。他愛のない話も含めて、フレンドリーに話せる関係性を育てること。言うなれば「雑談ができるような関係性の構築」を、私は大切にしているのです。

そのような関係を育むには、どうすればいいのか。私は、受け身ではなく、まず自分から歩み寄ることから始めたいと思っています。例えば「私、



工事現場に出るほか、発注する図面のチェックや修正、概算金額の算出といった作業も多い。

車が好きなんです」「ラーメンにはまっているんですよ」など、なんでもいいので自分について積極的に伝えてみる。

そして、相手に興味をもつこと。例えば現場でゲームをしている人がいたら「何やってるんですか?」と聞いてみる。温泉好きな

人がいたら「この辺でおすすめはどこですか?」と尋ねてみる。これくらい何気ない話題から、会話は始まります。

このように雑談できる間柄になっていくことで、やがて「実はトイレの工事についてお客さまからこんな声をいただいたので、しっかり養生していただきたいんです」といった大切なことも、きちんと伝わるようになっていきます。

何気ない雑談の上に積み重ねられた関係性があればこそ、相手の立場も具体的に想像できるようになります。ただ「決まりだから、しっかり養生してほしい」ではなく「工事に携わってくださっている作業員の皆さんにも困りごとが起きるから、改善したいんです」と、現場の方たちの立場に寄り添った発言の仕方になっていきます。

こうして無事に工事が終わると一安心です。自分が施工に関わったサービスエリアで、「トイレが広くなって、使いやすくなったね」といった声を聞くと、自分の仕事の意味を実感します。

技術やスキルも大切ですが、その道のプロたちが迷いなく実力を発揮できる環境をつくる仕事も、世の中には必要です。人と人が滞りなく話せること。伝え合える関係をつくること。その先に、安全で快適な高速道路がある。現場で交わされる「昨日、何食べました?」なんて何気ない会話も、ひょっとしたら、その安全を支える一つなのかもしれませんね。

相手を知り、見えないところをつなぐこと

#誰と、どう関わる仕事

お客さまと「やりたいこと」を話し合い、社内では「できること」を確認。双方をすり合わせて印刷物を作る

#どんな「隔たり」があるか

仕事で関わる人それぞれが「ベースとして持つ知識の差異」／協働作業における「互いの実情の見えにくさ」

#通じ合えた瞬間

対話によってお客さまの想いが明確になり、社内とも都度確認を取ることで、皆の力を合わせて良いものができた

ベースにもつ知識が違うから難しくもあり、面白くもある

ある日の仕事は、市役所の総務部長との話し合いから始まり、その後ケーキ屋さんでパティシエと、ねじ工場では職人さんと打ち合わせ。別の日には、学校の先生と対面してから、シラスを扱う水産加工会社のお話を聞き、イラストを描く個人の方とも連絡を取って。松本印刷の営業である私の仕事は、多様なお客さまと「どのような印刷物を作りたいか」を話し合い、社内のみならず協力して制作することです。編集者やデザイナー、コピーライター、工場の印刷・加工・発送の担当者など、社内の多くの部署とも関わります。

手掛けているのは、書籍や広報誌、カタログやチラシ、名刺や封筒、アクリ

松本印刷
営業本部
拠点営業部
増田麻里奈さん

ますだ・まりな●大学卒業後に入社。営業職で経験を積み、現在本店の主任を務める。学生時代には学内行事の運営委員を務め、サークル活動でフリーペーパーも制作。そのなかで「一緒に仕事をする人への感謝を忘れず、全員で作り上げる」ことの大切さを学んだという。



書籍や広報誌、シールなど作る印刷物はさまざま。ほかに宣伝用のノボリの印刷や、ホームページの制作なども手掛けているという。

ル素材やシール素材への印刷などさまざま。お客さまが何を望まれているか、コミュニケーションを取って進めることが欠かせません。

そのやり取りで一つのハードルとなるのが、ベースとしてもつ知識が違うことです。ねじやシラスといった

お客さまの専門分野について、私

は素人。お客さまが印刷物で何を表現したいのか最初はわかりません。一方で、印刷物の制作についてはお客さまが不慣れなことが多く、「とりあえず会社案内を作りたいただけけれど」と、内容未定でそこから相談したいという依頼もあるんです。

それだけに心掛けているのは、相手のことを知りたい、と思って、先入観をもちせずに話を聞くことです。「この業界のこの世代の方ならこんな感じを望むのでは」と思い込みで制作を進めると、齟齬が生まれます。

完成イメージがお客さまのなかでまだ漠然としていたら、私からもいろいろと投げかけ、目指すものを一緒に組み立てます。会社案内であれば「何ページぐらいを考えていますか」「どういう層に向けて作りたいですか」「学生に配りますか、取引先への説明で使いますか」などと。それを踏まえて内容も詰めていきます。すると、お客さまのなかでは「当たり前」になっていることが、外から見れば「新鮮」であることがわかり、今回の印刷物にとどまらず、以降のPRにも活かせるような波及効果が生まれることもあるんですよ。そういうのは、すごく面白いですね。

社内にもアンテナを立ててお客さまの希望に寄り添う

社内の各部署との連携でも、相手をよく知ろうとする姿勢が必要です。編集や印刷、加工はどう行われるのか。「このページ数でこういうデザインや加工で」と、自分ではできると思ってお客さまと話を進め、蓋をあけてみたらできなかった、となれば全員に迷惑をかけてしまいます。

お客さまのリクエストに私たちがうまく応えられないこともあります。紙面のデザイン案に、お客さまから修正の希望があり、直したものに再度修正が入り、そのラリーが何度も続いて…。そうなる原因の一つは、お客さまが望んでいること

を私がつかみきれておらず、制作現場に的確に伝えられていないこと。また、制作で何が難しいかを、お客さまに説明しきれていない場合もあります。

だからこそ制作過程では、社内の各部署とお客さまのあいだで「都度、確認」することを大事にします。懸念点は編集者やデザイナー、工場の社員にすぐ確認。お客さまから紙面への要望があれば、なぜそうしたいのか理由も深掘りして聞き、制作陣とも共有。要望に応えきれないならできることを共に考え「この理由で困難で、ただしこの点はこうすれば実現できます」とお客さまの思いに寄り添いつつ実情を伝えます。物事をうやむやのまま進めず、双方の声を届けて相互理解を図るのです。

いいものを作りたいその思いがかみ合うように

口数が少なく、印刷物の制作でうまくいかない経験をされたことのあるお客さまを担当したことがあります。はじめはどうコミュニケーションを取ればいいのか、不安でした。ですが何度かお会いすると、実はご本人のなかでいろいろと考えていらっしやることがあるのだとわかってきました。以前はそれを汲み取ってもらえず堂々巡りになったよう。頭の中にあるものを聞き出そうと努めていくと、とつとつと想いを語ってくださるようになり、印刷物のイメージも固まり、制作陣にスムーズにつながることができたんです。架け橋になれてよかった、と思いました。

私の仕事において、コミュニケーションとは、一緒に物事に取り組む相手のことをまず知ろうとし、そのうえで互いの見えないところをつなぐことです。お客さまも私たちも「いいものを作りたい」という想いは同じ。でも専門性や見えているものは異なるので、すれ違いが生まれます。だからコミュニケーションを取って皆の意識をつなぎ、全員が気持ちよく仕事ができるように地ならしをする。互いの力がかみ合い、お客さまが目指していたことを超えるプラスαのものを創ることができて、お客さまとも社内の人々とも「これ、いいですね!」と喜び合えたときに、一番の嬉しさを感じます。



印刷工場で社員と。現場の作業を知ることにも努め、一緒に制作してくれる仲間「感謝を声に出して伝える」ことも大事にしているという。

多様な コミュニケーションの 機会をデザインする 高校事例

実際に使うことなくして、コミュニケーションの力は磨かれません。
授業や特別活動の工夫、あるいは教師の関わり方を変えることで、
生徒が多様なコミュニケーションの力を
発揮する機会を創り出している事例を紹介します。

CASE

1

なかじょう
中条高校
(新潟・県立)

CASE

2

海城中学高校
(東京・私立)

CASE

3

天草高校倉岳校
(熊本・県立)

CASE

4

刈谷東高校
(愛知・県立)

CASE
1

地域と協働して「場数を踏む」機会を多数設け、意欲と自信につなげる

なかじょう
中条高校
(新潟・県立)

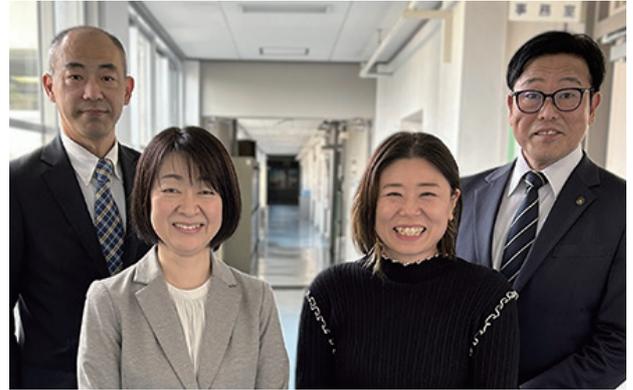
1910年創立／普通科総合選択制(探究教養コース・地域産業コース)／生徒数126人(男子82人・女子44人)／地域と連携した探究活動等により、第13回キャリア教育推進連携表彰(文部科学省・経済産業省)奨励賞を受賞。

トークフォークダンスや 小中学校での読み聞かせを導入

新潟県胎内市内唯一の公立高校である中条高校には、多様な生徒が入学する。素直さの一方で、コミュニケーションへの苦手意識や自信のなさがうかがえる生徒も少なくない。校長の横堀正晴先生は3年前の着任当初について、「生徒が学校を楽しんでいる様子があまり感じられなかった」と振り返る。そこから「イノベーション」を掲げ、「やれることは片っ端から取り組んできた」と言う。

イノベーションのポイントの一つは、生徒が多様な人と関わる機会を大幅に増やしたこと。その代表的な活動が、生徒と地域住民が短時間の対話を繰り返すトークフォークダンスだ。地域探究に向かう準備として、今年度から1・2年生を対象に始めた。当日は、生徒約80人に対し、幅広い年代の大人が84人集まった。ペアを替えながら、自己紹介、将来の目標、地域の課題や未来まで、お互いの考えを交換していく。会場には終始、笑顔と熱気があふれていた。

「多くの生徒が、コミュニケーション能力とはうまく話すことだと思い込み、『自分は苦手』と言います。しかし、そうではなく、相手の話を聞いて理解する力こそ重要です。お互いが理解しようとすることでコミ



写真左から教務主任・保坂和洋先生、本間由紀先生、中川千恵先生、校長・横堀正晴先生。

ュニケーションが深まる。そのことを実感する機会になったのではないのでしょうか」(教務主任・保坂和洋先生)

この成功を受け、手法を異学年交流にも応用。探究活動で学んだことをテーマに、1年生と3年生がトークフォークダンスを実施した。年度末には、同様に将来の目標や合格体験を話し合う予定だ。

「3年生には『思い切り“先輩面”して話していい』と伝えています。学年を横断する取組が少ないなか、自らの経験を誇る場にしてほしい」(保坂先生)

また、課外では、希望者を募り、近隣の小中学校での読み聞かせを始めた。読み聞かせには技術が要るため、事前指導を行い、何度も練習して臨む。

「最初は緊張で固くなっているけど、小学生や中学生に歓迎され、最後は感謝の言葉をもらい、達成感に満ちた笑顔で帰ってきます」(横堀先生)

このほか、探究活動や教科学習の延長で、県内および県外の高校との交流企画、外部コンテストへの参加など、新しい出会いや人前に出ていく機会を多数設定。結果、無口な生徒が学校代表として発表を行うなど、幅広い生徒に活躍の場が広がっている。

「人と関わるのが苦手な生徒たちも、場数を踏むなかで一歩ずつ前へ進んでいる。自信をつけ、場を楽しむようになってきました」(本間由紀先生)

生徒の意思を引き出す探究で コミュニケーション力を発揮

もう一つのポイントは、探究活動のリニューアルだ。以前の探究プログラムは、地域と連携して地域課題の解決策を考える“Need型”だった。しかし、「生徒の意欲を喚起することはできず“やらされ探究”になっていた」と保坂先生。「生徒にとって楽しい探究にしたい」と、これまでの地域との関係性は活かしつつ、生徒のやりたいことから出発する“Will型”へ内容を一新した。

1学年でのインタビューやファシリテーションなどのスキル学習と、そのスキルを実際に地域に出て使ってみる活動を経て、2・3学年では生徒がやりたいと思ったことをテーマにする「マイプロジェクト」に取り組む。例えば、「おいしいシュークリームを作りたい」と地域の洋菓子店に教えを請い文化祭で提供したり、赤ちゃんを泣き止ませる楽器の音色に興味をもち保育園で実験を行ったり、さまざまなプロジェクトが誕生。学んだスキルを活かして、地域と対話しながら進めていく活動を、教員とメン

ター役の県内5大学の学生が支援する。

「生徒がやりたいということは否定しない方針です。もちろん実現困難なこともあります。やりながら方法を探していけばいい」(横堀先生)

生徒は自身の想いや考えを教員に肯定されることで背中を押され、地域に飛び出し、やりたいことの実現のために必要な他者とつながり、関わっていく。そのなかで大きく成長する生徒もいる。積極的に人前に出るタイプではなかったある生徒は、「文化祭を盛り上げたい」と県内で活躍中のリーダーを招くプロジェクトに取り組んだ。同校後援会の総会でプレゼンテーションを行って費用を調達



小学校での読み聞かせ。小学生の純粋な反応に「嬉しかった」「練習したか良かった」と生徒たち。



トークフォークダンスでは生徒と大人がペアになり、ファシリテーターが出すテーマについて、1分程度の「話す」「聞く」を交互に行う。それを、相手を替え繰り返す。

し、交渉・調整も行い企画を実現させた。

「実現までにはいくつも障害があったが、いろんな先生たちが陰日向となり応援した。本人は何度も諦めそうになりながら、それを乗り越え、最後までやり遂げることができた」(横堀先生)

＼ 生徒インタビュー /



左：本間 秀さん(3年生)、
右：平田美里さん(3年生)

相手が大人でも自然体で話す

自分は人と話すことが好きで、地域の方とのプロジェクト活動にも楽しく取り組んできました。話すときは、相手が誰であっても、嫌な気持ちにさせないことと、自然体で接することを心掛けています。言いにくいことは言い方を工夫し、必要なら「すみません、無理です」とはっきり伝えるようにしています。卒業後は電気工事を行う会社への就職が決まっています。仕事ではお客さんとの会話が大事になるので、高校で培ったコミュニケーション力を活かして働いていきたいと思います。(本間さん)

相手を理解しようと話を聞くことを大切に

私は元々、人と関わることに少し抵抗感があったのですが、高校で学校外のいろんな年齢の人と接する活動が増えて、それを楽しいと思うようになりました。特に印象に残っているのは、小学校での読み聞かせ活動です。子どもたちの反応に元気をもらい、もっと関わってみたいと教育関係の仕事に興味を湧きました。コミュニケーションでは、相手を理解しようという姿勢で話に耳を傾けることが大切だと思っています。子どもを表面的に判断するのではなく、それぞれの良さを理解しようとする、そんな小学校の先生になりたいです。(平田さん)

生徒が自ら学校外に出ていき、多様な人の協力を得ながら成長する姿が、教員の意識も変えていく。

「生徒が自由に地域で活動することに、心配性の私としては、少し怖さもありました。しかし、思った以上に楽しそうに力を発揮する様子に、『こんなことができるんだ』と気づかされます」(本間先生)

そのなかで、生徒たちは自分なりのコミュニケーション力を発揮している。企業から転職し、今年度から同校に勤務する中川千恵先生は、「上司の顔色を見て上手に話す人が有能な社会人だとは思わない。この学校の生徒の、時には嫌なことは嫌と意思表示できる素直さは、大きな強み。連携する側にとっては非常に対応しやすいのではないかと話す。

横堀先生は、生徒の表情の明るさに3年間の成果を実感している。

「過去の蓄積の上に、地域からの応援と生徒自身の意欲がつながり、学校が元気になった。今後も取組のブラッシュアップを図っていきたい」(横堀先生)

実践のヒント

- 教員が生徒のやりたいことを否定せず、生徒のWillから始まる探究活動で、苦手なことにも挑戦しようとする動機づけを行う。
- コミュニケーションのスキル学習や、一対一のトークフォークダンスから始めるという、小さなステップを設定する。
- 地域の大人や大学生、小中学生、他校の高校生、校内の先輩・後輩など、年齢も立場も多様な人との接点をつくる。
- 地域探究、各種コンテストなどで、人と関わることや人前に出る場数を踏ませる。

CASE 2

演劇を通して未知と出会い、 異なる他者と対話し、協働する

海城中学高校
(東京・私立)

1891年創立／普通科／生徒数1954人(男子)。海軍予備校として創立され、1900年に海城学校に改称。創立の理念を受け継ぎ、「新しい紳士」の育成を目指す。

スピード・効率重視の今こそ、 時間のかかる対話で合意形成を

海城中学高校では、「対話的なコミュニケーション能力」と「コラボレーション能力」を「新しい人間力」と位置づけ、その育成に取り組んできた。なかでも特徴的なのが、演劇ワークショップ（以下、WS）を各学年で実施していることだ。体験学習推進委員会委員長・国語科主任の中村陽一先生は次のように話す。

「価値観が多様化した現代社会において、互いの違いを前提としながら意思疎通をはかることや、価値観の異なる他者と協働して問題を解決することはますます重要になっています。そうした力の育成に適しているのが演劇WSです。例えば、演劇WSの中で生徒たちは互いの異なるアイデアを擦り合わせながら、観客に伝わる表現を目指し工夫して作品を創作していきます。観客に届く表現に一つの正解があるわけではなく、生徒たちは他者と対話し協働しながら決まった答えのない課題を創造的に解決していきます。その体験を通して対話的なコミュニケーション能力やコラボレーション能力を学ぶことが期待されます」

演劇WSは第一線で活躍している演劇のプロをファシリテーターに迎えて実施している。プロに



体験学習推進委員会委員長・
国語科主任中村陽一先生

任せるのではなく、ワークショップデザイナーの資格をもつ中村先生や他の教員が協働してオリジナルのプログラムを創っているのが特徴だ。

中学1年次には、学校内で過ごす時間や登下校などの時間を、互いが安心して快適に生活するためには、どのように他者と関われば良いのかを体験的に学ぶ「安全WS」を実施。年3回行い、例えば初回は、無意識のうちに他者に不快感を与えるシーンを演じた劇と、無意識のうちに自分たちが騒がしくしてしまうシチュエーションとを比較し、無意識を意識化していく。中学2年次には、これまでに出会ったことのない大人の話聞き、その話を基に自分たちで劇を創り演じる「聞き書きWS」、さらに中学3年次には、修学旅行の思い出を演劇にする「修学旅行WS」を実施している。いずれもグループで取り組み、生徒たちは意見を擦り合わせながら1本2～3分の台本を創り、全員が演者となり舞台に立つ。

「演劇を創る過程で対話は不可欠です。対話による合意形成は時間がかかる面倒なものですが、タイパ・コスパが求められがちな今の時代だからこそ、仲間とじっくり対話し協働する経験をしてもらいたいです。グループで創作した作品を発表した時に、観客から笑ってもらったり拍手をもらったりすると、生徒たちは本当に嬉しそうな顔をします。多様な価値観をもつ他者と粘り強く対話をして創

り上げた作品が観客に伝わったことが嬉しいのでしょ。その経験は、今後他者に向けて何かを表現しようとする際のモチベーションにつながると思います」

無意識のうちに排除されがちな 未知との出会いを演出する

さらに、高校1年次にはキャリア教育の一環とし



高校1年次のワークショップの様子。100分×2回の授業で、架空の職業を演劇に仕立て上げる。



仲間と話し合いを重ねながらストーリーを創っていく。その過程では、意見の相違や壁にぶつかることも。

て、架空の職業の人材を募集するCMを演劇にして発表するWSを実施。時間管理人、三色巻紙配達人、ひらめきランプ交換人など、与えられた架空の職業について考える。「既存の職業は調べれば情報が出てきますが、架空の職業については自分の頭で考えなくてはなりません。具体的な仕事内容、利益の生み出し方、やりがいなどを考えることが、自分の職業に対する考え方や大切にしている価値観などに気づききっかけになっているようです」と中村先生は言う。

集大成となる高校2年次には、沖縄への修学旅行のなかで演劇のWSを行う。「修学旅行を、未知との出会いがある有意義なものにしたい。沖縄で生きる人の生の声を生徒に届けたい」という思いから、同校の教員と現地の劇団員たちが一緒に考案したプログラムを実施している。沖縄の人に「わったーシマ(わたしの地域)」への愛を語ってもらい、生徒たちはその魅力を伝えるCMを創る、とい

う建て付けた。

「既存のイメージとは異なる沖縄について知ってほしい」と中村先生は言う。

「今の時代は、インターネットのアルゴリズムによって、自分の好みに合った情報や自分の関心事に近い情報ばかりが入ってきます。無意識のうちに、自分とは異なる意見や考え方、知らないものに触れる機会がなくなり、世界が狭くなっていることに危機感を覚えています。未知と遭遇する場面、異なる他者と出会う場面を設けることが、学校教育においても重要だと感じています」

偶然性・ランダムネスを設計し、生徒に任せ、生徒を待つ

10年以上にわたり、体験学習の設計・推進に取り組んできた中村先生。演劇という手法を取り入れる意義について、次のように語る。

「違いを尊重しよう、互いを認め合おう、対話を通



地元の劇団員の協力を得て行われる沖縄での演劇ワークショップの様子。生徒たちは半日間で「わったーシマ」の魅力聞き出し、CM仕立ての演劇を創り上げる。

してコミュニケーションをとろう…と教員が言葉にするだけでは、生徒には届かないでしょう。大切なのは生徒が自分で気づくことであり、その手法として演劇はとても有効です。楽しみながら、自分で考えながら、そして身体を使いながら活動するプロセ

スを通して、それぞれの気づきや学びを得ることが出来るからです。WSをデザインする際には、偶然性やランダムネスを設計するよう意識しています。そんな偶発的な経験から生徒が自発的に多くの気づきを得るためには、生徒に任せ、生徒を待つことが大切です。教員が言語化してしまうと、そこで生徒の思考は止まってしまう。あえて言わない。迷ったら、待つ。これは普段の関わりにおいても大事なことだと思います」

今年の夏休みには、初めての取組として、他校の生徒も交えた「サマーワークショップ」を実施した。中学2年生から高校2年生まで、性別も年齢も異なる多様な生徒が集い、共に朗読劇に取り組んだ。中村先生は「今後も異なる価値観をもった他者と出会い、対話をする機会をより多く設けていきたい」と締めくくった。

＼ 生徒インタビュー /



左：中谷蒼介さん
(高校1年生)、
右：松尾治輝さん
(高校1年生)

わかり合えないなかで 共通点を見出すのが面白い

私は模擬国連に参加しているのですが、わかり合えないなかで共通点を見出し、意見を擦り合わせてかたちにしていくプロセスは、まさに演劇と共通しています。また、演劇での学びを活かして、模擬国連や部活などの場でも意見を出しやすい雰囲気づくりを大事にしています。演劇のワークショップではランダムにグループが組まれます。普段あまり話したことのないクラスメイトと意見を交わし合い演劇を創るなかで、お互いの知らなかった一面や意外な一面が見えるのも面白いところです。(中谷さん)

キャラを変えることへの 抵抗感がなくなった

最初は演じるのが恥ずかしく、自分のキャラを脱いで役に入り込むことに難しさを感じていました。しかし、次第に慣れて人前で演じる度胸がつき、声も張れるようになり、キャラが変わることへの抵抗感もなくなりました。演劇創りの場では、自分をオープンにすることになるので、お互いのことがよくわかり、仲が深まります。相手と話をする際には、まずは相手の意見を受け入れてから自分の意見を提示することも意識するようになりました。(松尾さん)

実践のヒント

- 身体的に学び、自ら気づかせるために、体験学習(演劇)を取り入れる。
- タイパ・コスパ重視ではなし得ない合意形成を体験するために、時間をかけて仲間と対話・協働する場を設ける。
- 未知との遭遇、異なる他者との出会いを通して、「違う」を体感させる。
- 偶然性やランダムネスを設計し、想定外の学びを誘発する。
- 思考を止めないため、生徒に任せ、待つ(教員が言語化しすぎない)。

CASE 3

生徒・教員がコミュニケーションのあり方を再認識し、安心して学べる環境をつくる

天草高校倉岳校
(熊本・県立)

1952年創立／普通科／生徒数25人(男子9人・女子16人)。校舎の目の前に海が広がり、マリンフェスタをはじめとした学校行事や地域交流、ボランティア活動も盛ん。

「学びのUD化」で 多様な生徒の学びを支える

天草高校の分校である倉岳校。少人数の学習環境を活かし、生徒一人ひとりに応じた指導・支援を行っている。同校は熊本県教育委員会より「高等学校における『学びのユニバーサルデザイン』構築事業」のモデル校指定を受け、2019年8月から2021年3月まで、「学びのユニバーサルデザイン(以下、UD)化」に取り組んだ。

学びのUD化とは、すべての生徒が安心して学べる教育環境を整備する取組のこと。「授業づくり」「環境づくり」「人間関係づくり」の3つの観点から、安心できる人間関係や環境のなかでわかりやすい授業が行われる、という学びのあり方を目指す。その根底にあるのが、生徒同士や生徒と教員とのコミュニケーション環境の再構築。生徒のみならず、教員のコミュニケーションの変容を促すことを意図しているのが特徴だ。取組の背景について、学びのUD推進委員会委員で教務主任の福田英昭先生は、次のように話す。

「本校には、特別な教育的支援や配慮が必要な生徒や中学時代に学校に通えなかった生徒など、学力差も含めて多様な生徒がいます。そうしたなか、人と関係性を構築するのが難しい、教員の指示が



学びのUD推進委員会委員の福田英昭先生(右)、同・川上朝陽先生(左)。

伝わりにくい、ペアワークが成立しない、その結果として学力が定着しない…といったケースが一部で見受けられ、課題になっていました。特別な支援の必要の有無に限らず、すべての生徒が安心して学べる環境を整え、主体的・対話的で深い学びを実現するためにも、“伝える・伝わる”をなんとかしたいという思いから、学びのUD化の取組が始まりました」

学びのUD化の指針となる 生徒編・教員編「マナスタ」

同校では、学びのUD推進委員会を中心に検討を重ね、倉岳校版学びのスタンダード「マナスタ」を生徒編・教員編の2種類作成した。授業づくり・環境づくり・人間関係づくりの枠組で、生徒編は19項目、教師編は28項目からなり、チェックリストもついている(45ページ^図)。内容を部分的に更

新しつつ、現在も全生徒・教員に配付しており、年2回、振り返りの機会を設けている。

「マナスタでは、生徒、教員、それぞれに意識してほしいことを挙げています。当たり前に見えることや基礎・基本も含めて言語化したもので、一つひとつは難しいことではありません。でも、私自身もそうですが、日々の学校生活のなかでは、つい忘れてしまうこともあります。折に触れて項目を目にすることで改めて大事なことを認識し、実践するようになると思うんです。その点で、マナスタの存在は大きいと感じています」

マナスタに基づき、授業や環境については、具体的なアクションとしてUD化が進んでいる。例えば、授業の冒頭でその回の目標や流れ・時間配分を提示する、振り返りの時間を設ける、指示は一度に一つだけ出す（複数出すと混乱してしまう生徒がいるため）、プリントなどにはUDフォントを使用する、掃除などの作業手順を明示する…といったこ

とだ。福田先生自身も、生徒の目線に立って、授業の進め方を意識するようになったと言う。

「以前は目標や流れを提示せず、時間配分も適宜という感じでした。授業のやり方を変えたことで、生徒からも何をどこまでやるかが明確になってわかりやすくなったと言われましたし、私自身、タイムマネジメントの意識が生まれました。生徒への指示出しについても、どうしたら伝わるかを意識するようになり、同様の声は教員から多く寄せられています」

ワークショップを通して、 自分ならどうするかを考える

人間関係づくりについては、年2回、全校生徒を集めてワークショップを開催している。例えば、今年度の前期は「自己表現のしかたを理解しよう」と題して、相手も自分も尊重しながら自分の意見や要望を伝えるアサーティブ・コミュニケーションを扱った。具体例を通してアサーティブな表現を学び、



人間関係づくりのワークショップの様子。ワークシートを使い、具体的なシチュエーションを想定して「自分ならどうするか」を深めていく。

あるシチュエーションにおいて「こんなとき自分ならどう表現するか」を考え、学年混合のグループで共有する。ワークショップを担当する、学びのUD推進委員で養護助教諭・特別支援教育コーディネーターの川上朝陽先生は、次のように話す。

「扱うテーマは、傾聴、自己表現、アンガーマネジメ

ント、断り方など、その年の生徒の状況や課題に合わせて選んでいます。SNSでのコミュニケーションに課題を感じていた年には、SNSのグループトークでのやりとりを題材に、読んだ人がどう感じるか、自分ならどのように返信するかなどを話し合いました。どう伝えれば相手が嫌な気持ちにならないか、空気

☒ 「マナスタ(教師編)」チェックリストの項目例 (一部抜粋)

ダウンロード可

【授業づくり】

- 導入では生徒に本時の目標を提示している。
- 授業の流れと時間配分を黒板左側に提示し、生徒が見通しを持ちやすくするとともに集中力に配慮した授業構成を行っている。
- まとめでは本時の目標に沿って振り返りを行い、生徒自身が意識の変化を振り返ることができるようにしている。
- 板書でのチョークの色使いを明確に分け、その意味を伝えている。

【環境づくり】

- 一つの指示に対して一つの行動ができるよう指示している。
- 否定、命令、禁止の言葉ではなく、肯定的で次の行動につながる言葉かけをしている。
- 教室前面は、必要なもののみを掲示している。
- 学年や発達段階に応じて、1日や1週間の予定を見やすく掲示するようにしている。
- 予定の変更は早めに伝え、視覚的に分かりやすく示している。

【人間関係づくり】

- 積極的に声をかけている。
- 些細な行動や、やって当たり前の仕事に対しても、お礼を言ったり褒めたりしている。
- 良い反応や考えを取り上げ、全体で共有している。
- 間違いや失敗は否定せず、受け止めている。
- 意見を述べたり調べたことを発表したりした後は、称賛や賛成の気持ちを込めて拍手をするよう促している。
- ペア学習、グループ学習等、学習の形態を工夫している。
- 他者の考えを否定せず、学び合える雰囲気をつくっている。
- 一人一人が活躍したり、認められたりする場をつくっている。

※生徒編・教師編の全編がダウンロードできます。

ダウンロード可

※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.457)

を悪くしないかを気にする生徒が多く、コミュニケーションのヒントになればと思っています」

また、各学年のLHRなどで実施できるよう、人間関係づくりに役立つ各種プログラムと指導案を用意している。例えば1年生では、毎年4・5月に「サ

イコロトークング」を実施。6つのトークテーマを用意し、順にサイコロを振って、出た目の数のテーマについて話をする、という活動だ。生徒同士が仲良くなるきっかけづくりに活用している。

学びのUD化の取組により、人間関係の部分でも「相手の気持ちを考えるのが苦手な子、思ったことをすぐに口に出してしまう子など、対人関係が苦手な子が少し成長したと思う」といった声が教員から寄せられており、「生徒や教員の意識づけになっている」と福田先生。今年度は、天草高校(本校)でも学びのUD化を推進する動きがあり、11月に行われた研修では福田先生が倉岳校の取組を紹介し、教科別のグループワークでは倉岳校の教員らがファシリテーターを務めた。一方、「校内研修が十分に行えていないのが課題」と福田先生。「マナスタも作成当時に比べると趣旨や方法論の共有が徹底できていない部分もあり、改めて力を入れ、倉岳校の特色として引き継いでいきたい」と締めくくった。

＼ 生徒インタビュー /



左：長尾華弥乃さん
(1年生)、
右：菊池美愛さん
(2年生)

普段は気にせず使っていた 言葉を振り返るきっかけに

全校生徒で取り組んだ人間関係づくりのワークショップでは、2・3年生と同じグループでした。こんなとき自分ならどう表現するかを考えて共有する際には、先輩たちから自分では思いつかないようないい意見が出ていてすごいなと思いました。そして、ワークを通して、普段はあまり深く考えずに言葉を発していたことに気づき、自分の発言が相手を傷つけていることもあるかもしれないと思いました。毎回、言葉を選んで話す余裕はないかもしれませんが、伝え方について考えるきっかけになって、よかったです。(長尾さん)

相手の感じ方を想像する 大切さと難しさを実感

マナスタや人間関係づくりのワークショップがあることで、「ああそうだった」と改めて立ち返ることができています。やはり、深く考えずにノリで言うってしまうこともあるので…。また、人とコミュニケーションをとるときには距離感を意識しています。一人ひとり感じ方や受け止め方は違うので、相手の状態を確認しつつ、こういうタイプなんだな…と察して合わせる感じです。でも、その「タイプ」は私の勝手な思い込みかもしれない、そこに難しさを感じています。(菊池さん)

実践のヒント

- 「授業・環境・人間関係」の3観点で心掛けるべきことを明文化。振り返りの機会を設け、再認識する。
- 人間関係づくりのワークショップを開催し、コミュニケーションのとり方を実践を通して学ぶ。
- 教員がコミュニケーションを学び、環境づくりに取り組む。

CASE 4

他者との関係性のなかで互いの変容を促す からだを使った「人を好きになる授業」

刈谷東高校
(愛知・県立)

1969年創立 / 昼間定時制課程・普通科 / 生徒数526人(男子245人・女子281人)
／兵藤先生が顧問を務める演劇部は高校演劇の全国大会に何度も出場している。

与えられた役割で 話し合いに参加してみる

刈谷東高校昼間定時制の3・4年次に、週2時間設置されている学校設定科目「リベラルアーツ国語」。ある日の授業を見学した。

最初に実施したのは、「役割を決めて話し合う」というワーク。4～5人のグループになり、じゃんけんで、積極的に意見を言う「イノベーター」、意見を調整する「調整役」、みんなを励ます「モチベーター」の役割を割り振る。提示されたテーマ「担任の先生を驚かせて喜ばせるのために何をする?」について、各自が役割を意識しながら話し合う――。

役割を設定するねらいについて、担当する兵藤友彦先生はこう話す。

「本校には、3つの役割いずれの経験もしてこなかった生徒がいます。人を不快にさせないよう忖度し、話し合いの場に息を殺して『そこにいるだけ』。『自分はこういう人だから』と諦めてきた。だから無理矢理にでも役割を試してみしてほしいのです。意外とできるかもしれないし、自分には合わないと感じるかもしれないが、やってみることが大切です。人はいろんな顔を使い分けて生きていく。その引き出しを増やしてほしいと思っています」

授業の後半は、各グループに「かぐや姫」や「浦



「リベラルアーツ国語」を開発した兵藤友彦先生。全国各地での出前授業も実施している。

島太郎」などの昔話が指定され、1分半の即興劇をつくった。ストーリーがあやふやな部分は情報端末で調べて補い、セリフや配役は自分たちで話し合っで決める。制作と練習に与えられた時間は30分程度。動きが止まっているグループは見当たらない。最後はグループごとに劇を披露。全身を使って役を演じる生徒たちに、緊張感や固さはあまり見られない。独自にアレンジした展開やセリフに、観覧者からどっと笑い声上がることもしばしばだった――。

「ストーリーや演技ではなく、答えのない問いに向かってみんなでつくるプロセスに意味があります」
(兵藤先生、以下同)

まず、意識の向きを 他者へ向けることから

同校の生徒は6～7割が不登校経験者で、外国籍の生徒も多い。「人が怖い、人目が怖いと言う生徒たちが、1年間の授業を通じて、人を好きに

なることができれば大きな前進になるのではないか」。その思いで兵藤先生が実施している「リベラルアーツ国語」は、「聞く・話す・間をつくる」という3つの領域を学ぶ授業だ。

「『間をつくる』とは、人と人が単なる情報を送受信することではなく、別の考えをもった人同士がジャズセッションのように共振するようになるイメージです。

生徒たちは社会に出たら、多様な人と協働していくことが求められます。学校は今、そんな社会とのギャップを埋めていく取組をしていく必要があります」

兵藤先生は顧問として同校演劇部を何度も全国大会に導くなかで、演劇レッスンが生徒の行動変容を促すことを確信した。そこから、「演劇のプロがいなくても教員ができる、演劇を用いた授業」を目



授業前半、役割を決めた話し合い。この日話した「担任の先生を驚かせて喜ばせる」というアイデアは、後日クラスみんなで実行する予定。



授業後半の即興劇の発表。発表時間が余ると「あと10秒ある。つなげて」と兵藤先生。生徒はアドリブで演技を続けた。

指し、生徒の成長を促した演劇レッスンを編み直して「演劇表現」という選択科目を作った。さらに多くの生徒に提供するため、昨年度、必修科目として「リベラルアーツ国語」をつくり、兵藤先生は毎時間指導案をつくり国語科の教員5人と実施している。

1学期のテーマは一人一人の関係を築くこと。2人1組で、お互いの指先で箸を挟む、背中合わせで立ち上がるなど、からだを使ったワークを行う(図)。「自分に集中的に興味に向いている生徒も多いので、まず意識の向きをクルッと変え、他者を発見することが必要。言葉によるコミュニケーションスキルの前に、からだを使って他者を感じ取ることから始めるのが特徴です」

2学期はグループでのやりとりを練習する。即興演劇のレッスンから始め、短い芝居の創作にも挑戦する(図)。

「即興は相手を見ないとできないものです。他のグループの芝居を見て、自分たちの芝居を臨機応変に調整するようなことにも挑戦します」

そして3学期は「一人」になって、本や言葉と出会う。最後は、日常生活を基に「私」を1分間のパフォーマンスにする。

「表現にはその人が出ます。それを共有することで、『困難を抱えているのは自分だけではない』とお互いに共感することが大切です」

人と話す楽しさが 経験できる授業を

生徒は「リベラルアーツ国語」について「一番好きな授業」「楽しい」と口を揃える。4月の授業開始当初、相手を見ることや近寄ることに拒否感があり、簡単なレッスンもできない生徒が大勢いた。「こんなことができた」という小さな自信を積み重ね、話し合いや協働ができるようになってきた。

4月から授業を受けてきた生徒たちは、「授業でイノベーター役をやって得意だと気づき積極的に意見を出すようになった」「こだわりなく動けるようになった」「以前は誰かが決めてくれるのを待ってい

図 取り入れている演劇レッスンの例

● 箸を挟んで立つ(1学期)

2人が目を閉じて割り箸をお互いの人差し指で挟み、声かけや合図なしで落とさないように立ち上がったたり、1人が箸の下をくぐるように回ったりする。

● ～代の娘とお母さん(2学期)

グループごとに決められた設定(10代の娘と母/20代の娘と母/40代の娘と母/60代の娘と母)で芝居を創作。発表直前に『4つの芝居をつなげて連続性のある物語にして』と注文をつける。生徒は前の発表の設定を引き継ぎ、その場で自分たちの芝居をアレンジしながら発表する。

生徒インタビュー /



左：斉藤愛華さん
(3年生)、
中央：荒木莉杏さん
(3年生)、
右：竹内惺羅さん
(3年生)

人間に興味湧き始めた

私は初対面でもすぐ話しかけるほうです。でも、以前は相手はどう思っているか考えようとしていなかった。よくしゃべっていても、相手がどういう人か全然知らなかった。もっと言うと、自分が何を考えているかも意識してなく、目の前の出来事をただ見ているだけだったのかもしれない。この学校で「聞く」ことを覚え、人間というものに興味湧き始めました。「リベラルアーツ国語」を通じてクラスの関係性がぐんと良くなり、今は誰とでもなんでも言い合えるという安心感があります。(竹内さん)

自分の気持ちを言葉にするように

学校そのものが怖いという状態でこの学校に入学し、がんばっている人々と関わるようになって、今はすごく楽しいです。最近、自分の気持ちを言葉にして伝えることが多くなったように思います。中学の時は思うように学校に通えずふさぎ込むことが多く、家族にも自分の思いをあまり言えずにいました。それで苦しくなって、ある日突然爆発しちゃうみたいなことがありました。今は、良いことも悪いことも言語化して家族に伝えています。溜め込むこともなくなり、すごく気が楽になりました。(荒木さん)

相手をもっと知りたい

中学時代に友達のつくり方がわからなくなっていました。でも、高校で目が合ったことがきっかけで友達ができ、相手の話を聞くことの大事さや、違うと思ったことははっきり言ったほうが良いことがわかってきました。コミュニケーションとは「相手を知ること」かなと思います。今、クラスの3分の1が外国籍の子で、お互いの言語を教え合ったり、自国の料理を持ってきてみんなで食べたりするのがすごく楽しいんです。相手の言葉を理解したい、もっと話せるようになりたいと思っています。(斉藤さん)

た。今は自分のやることは自分で決めて動くことが増えた」など、それぞれ自身の変化を感じている。

「まず生徒と私、次に生徒同士の信頼関係をつくる。そのなかでのやりとりで、生徒がお互いに変わってくる。目指すのは行動の変容で、内面を変えろとは決して言いません。しかし、関係性のなかで自然と内面も変わってくるものです」

こうした実践を踏まえ、ほかの高校や大学でも出前授業を実施している兵藤先生は、「このような授業が必要なのは本校の生徒だけではない」と言う。

「今、『話す』とはオンライン上のメッセージ交換のことで、対面で話すことは『リアルに話す』と言い、オンラインで『話す』ほうが気が楽なのだ、大学生たちも言っていました。そんな世界に生きているのか、と驚きました。どうすれば『リアルに話す』ようになるかと聞くと、『楽しければ』と。それなら授業でリアルに話して、たくさん楽しい経験ができるようにすればいいのではないかと。多くの若者にそんな経験ができる授業を行っていきたいと思います」

実践のヒント

- 言葉を使ったスキルの前に、からだを使ったコミュニケーションを練習。それを楽しいと感じられるようにする。
- 一対一の関係性づくりから始め、数人のグループへと徐々に対象を広げ、最後は「自分」に向き合う。
- 教員との間の信頼関係が、コミュニケーションを学んでいくベースになる。

＼ まだある！ ／ 実践のヒント

取材では生徒たちの今を見つめ、それぞれに工夫を凝らす先生方の取組と同時に高校生たちにもコミュニケーションについての考えを聞いてきました。最後に、目の前の生徒に対し、小さく始められる実践を紹介します。

先生への インタビューで練習

場面

総合的な探究の時間／部活動

●総合的な探究の時間では、さまざまな大人と対話ができる企画をしました。スモールステップで聞く力や質問力を育成するため、まずはインタビュー手法について学び、先生方を相手にしたインタビュー練習をしました。また、部活動では自分たちの目的や目標を設定する話し合いを通して、どのように先生方に関わってもらうかを考えさせました。(群馬県立尾瀬高校／田崎 潤先生)

集団討論の場で 教師はじっと我慢

場面

進路指導

●面接指導やグループディスカッション指導が必要になるタイミングで、集団討論の場を設けていました。「誰かの発言を否定しない」「おへそを話し手の方に向けてうなずきながら聴く」等のルールを設けて、話しやすい雰囲気づくりを工夫しました。話が止まると、ついヒントを出したりして促したくなるのですが、じっと我慢することも大切だと学びました。生徒は話す材料はちゃんともっている。うまく話す機会を用意できていないだけ、と実感することが多かったです。(京都府／匿名)

年間を通して 多様なチームで協働

場面

教科の授業

●地歴科&公民科の授業で単元ごとにチームを編成し直し、年間を通して多様なチームでディスカッションしたり、作品制作をしています。チームのチーフに権限委譲をし、子どもたちの意志決定や合意形成過程を重視しながら授業を展開しています。多様なチームで活動するので、年間の振り返りでは「学級全体のチーム力が上がった」とか、「話し合うことが当たり前になった」と感じている生徒が増えました。(宮崎・私立・宮崎第一中学高校／猪野 滋先生)

ピアカウンセリングの トレーニング

場面

任意参加の「土曜講座」

●希望者を対象に「中大式ピアカウンセリング」の手法を取り入れ、自己理解や傾聴のトレーニングを行っています。ピアカウンセリングとは、心理的な援助のため仲間の話をきくこと。トレーニングによって相談に乗るための大切な要素が向上する可能性が研究によって示されています。参考：横湯園子・編『ピアカウンセラー養成プログラム―自分がわかり、人の話がきける生徒に』かもがわ出版(2010年)。(東京・私立・中央大学杉並高校／大館瑞城先生)

ゲームのルールを自分たちで考える

場面
人権教育

●「仲間外れをつくらない仲間づくり」を実践しています。例えばピンポンパングームをした後に、「車椅子の生徒がいたらどういルールが必要ですか」と問い、生徒たちが追加のルールを作成して実際にゲームをします。コミュニケーションはルールがあることで成立しますが、ルールは逆に仲間外れを生み出します。そうならないように生徒たちにルールをつくらせていく実践は、通常の授業でのグループワークなど、日々の活動にフィードバックされていると感じています。(奈良・私立・智辯学園奈良カレッジ中学部高等部／松本和志先生)

編集協力委員の先生方に聞いた 「高校生は今」

この10年で見れば、中学校での学習の変化もあり、高校入学時点でペアワークやグループワークなどの活動に拒否感や忌避感を示す生徒が大きく減少している実感がある

(大阪府立桜塚高校・田上 浩先生)

少人数クラス等、発言しやすい雰囲気のなかでは、自己表現をしやすいように感じています

(千葉県立大原高校／宮澤 勝先生)

人とのつながりや対話の機会が不足している影響か、自分が考えていることをうまく整理し、他者に伝えることが難しいと感じている生徒が多い印象を受けている

(北海道立北海道標茶高校・今野翔介先生)

デジタルネイティブなSNS世代に加え、多感な小学校高学年から中学生の時期をコロナの制限下にすごした高校生のコミュニケーション感覚は、極めて個人差が大きく、多様という言葉でくるしかなく、とまどいを感じています

(大阪府立桜塚高校・田上 浩先生)

＼ こんな支援も /

演劇の専門家を派遣する文化庁事業

●公募型で、採択されれば文化芸術団体または個人・少人数の芸術家を派遣する事業。芸術鑑賞や体験の機会だけでなく、複数回の計画的・継続的なワークショップを実施することもできます。(編集部)



文化庁「学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業」

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsubunka/shinshin/kodomo/>

高校生が考える 「コミュニケーションとは」

自分と相手との共通点と相違点を丁寧に探し、見つけ出すこと

(海城高校・中谷さん)

この人と一緒にやりたいと思ってもらえるよう、相手の気持ちをつかむこと

(海城高校・松尾さん)

楽しくしゃべれること

(刈谷東高校・荒木さん)

相手を知ること。知れるとすごく楽しい!

(刈谷東高校・斉藤さん)

自分から話しかけたり、自分のことを相手に話すこと

(刈谷東高校・竹内さん)

話すことだけだと思ってました

(天草高校倉岳校・菊池さん)

一人ひとり違う、相手の距離感に合わせること

(天草高校倉岳校・長尾さん)

相手を知ろうとすること

(中条高校・平田さん)

相手がどう思うか考えています

(中条高校・本間さん)